

ワカモノシエソ

プログラムヲ

カイトイシ

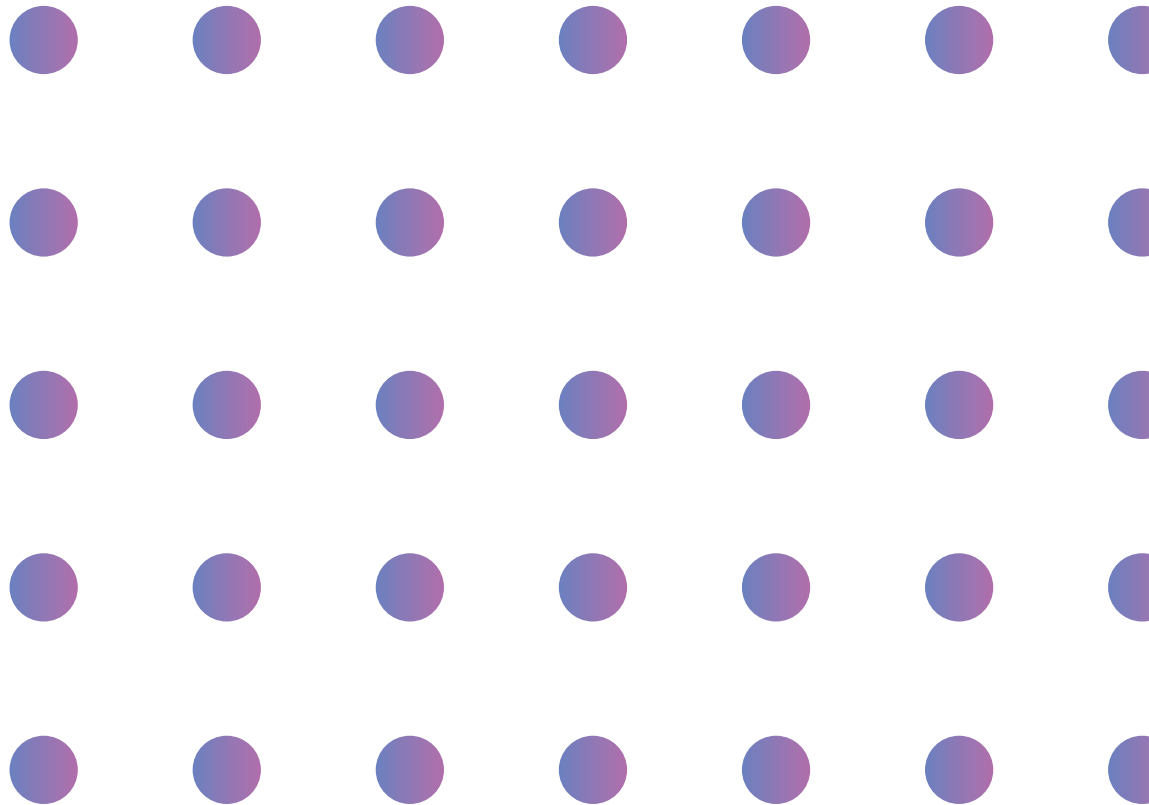
ソウゾウスル

シンポジウム

「若者支援プログラムを解体し、創造する：

9年間のあゆみとこれから」

報告書



はじめに

この報告書は、2022年5月14日に開催したシンポジウム「若者支援プログラムを解体し、創造する：9年間の歩みとこれから」の内容を記録したものです。

本シンポジウムは、横浜美術館と株式会社K2インターナショナルによる協働事業「若者支援プログラム」の意義や特徴、課題について検討することを目的として開催されました。2022年現在、横浜美術館は大規模改修のため、開館以降初めての長期休館のただ中にあります。仮拠点での日々は、連日多くの来館者を迎えて事業を実施してきた開館時とは異なり、30余年にわたる活動の足跡を改めて振り返り、これからの美術館の在り方について議論を深める貴重な機会となっています。リニューアルオープンという大きな節目を目前にしたこのタイミングで、10年という一つの区切りを迎えようとしている「若者支援プログラム」についても、プログラムの「これまで」と「これから」を検討するための場を持ちたいと考え、今回のシンポジウムの企画に至りました。

シンポジウムの構成を考えるにあたっては、美術館職員の視点によるプログラム紹介と自己評価という枠を超え、できる限り多角的にプログラムの姿を捉えることを重視しました。結果として、美術館職員、若者支援施設スタッフ、過去のプログラム参加者、若者支援に関する専門家、大学教員がそれぞれの観点からプログラムについて語るという盛り沢山の内容となりました。シンポジウムはオンラインで行い、全国津々浦々から計52名に参加いただきました。その多くは美術館教育や福祉、社会教育の現場に携わっておられる、または強い関心をお持ちの方々であったことから、

後半のディスカッションにおいては参加者からの質問を起点に議論を深め、登壇者とはまた異なる角度からプログラムに光を当てることができたと考えています。

プログラムを様々な立場から捉えなおし議論を深めていく過程の中で、「若者支援プログラムを解体し、創造する」という試みは、より大きく抽象的な問いへとつながっていったように思います。様々な課題を抱える人々に対して美術館は何かできるのか。何をしようと試み、何を達成してきたのか、そして何には力が及ばないのか。美術とは、学ぶとは、働くとはどのようなことなのか。シンポジウム当日はもちろんのこと、実施に至るまでの準備期間もまた、こうした問いに正面から向き合う時間となりました。この大きな問いに対して今回議論できたことはごく一部に過ぎませんが、この報告書を通して、さらなる議論の端緒を開くことができれば幸いです。

若者支援プログラム報告書編集委員会

謝辞

シンポジウムの実施にあたり、アンケート・インタビューにご協力いただいた「若者支援プログラム」参加者、ご登壇と寄稿をいただいた佐藤洋作氏およびNPO法人文化学習協同ネットワークに心より感謝申し上げます。また、特定非営利活動法人日本補助犬情報センターには当日の字幕表示に加え、報告書の土台となる書き起こしデータをご提供いただき、まことにありがとうございます。本シンポジウムならびに報告書は、公益財団法人前川財団による助成（2021年度 家庭・地域教育研究助成）を受け実現したものです。

Contents

- 2 はじめに
- 4 シンポジウムの趣旨と、当日の次第 [梨本加菜 鎌倉女子大学](#)
- 6 登壇者プロフィール

シンポジウムの記録

Chapter1 プログラムをふり返る

- 8 報告1 生きづらさを抱えた若者とアートをつなぐ [端山聡子 横浜美術館](#)
- 19 報告2 若者支援施設における展開～参加者の声～ [岩本真実 K2インターナショナルグループ](#)

Chapter2 「若者支援」を俯瞰する

- 24 報告3 リスクを抱えた若者が息づくコミュニティとアート：農場・ベーカリーの活動から [佐藤洋作 NPO法人文化学習協同ネットワーク](#)

Chapter3 若者支援プログラムを評価・再検討する

- 30 報告4 美術館と福祉、教育のあいだ：若者支援プログラムの論点 [梨本加菜 鎌倉女子大学](#)
- 34 ディスカッション 若者支援プログラムを評価・再検討する

コラム

- 42 「みる・つくる・はなす・きく」を繰り返し、世界観を広げる [端山聡子 横浜美術館](#)
- 44 研究プロジェクトとシンポジウムの経緯 [梨本加菜 鎌倉女子大学](#)
- 46 用語集
- 47 編集後記

シンポジウムの趣旨と、当日の次第

text 梨本 加菜 鎌倉女子大学 児童学部教授

本シンポジウムは、横浜美術館の教育普及グループと、株式会社K2インターナショナルグループが2014年から行ってきた「若者支援プログラム」の意義をたしかめ、「これから」を考えることを目的に企画されました。このプログラムは、「鑑賞（みる）」と「制作（つくる）」を組み合わせた手法と、美術館の職員が若者のいる施設に向くアウトリーチに特色があります。主に20、30歳代の、現代社会特有の生きづらさを抱えた若者に向けた美術館の事業そのものが先駆的な取り組みであり、新型コロナウイルス感染拡大の影響も加わって、シンポジウムの企画も解体と創造をくり返しました。

シンポジウムの元となった調査研究は、横浜美術館の端山聡子さんと古藤陽さん、K2インターナショナルの岩本真実さん、そして鎌倉女子大学の梨本加菜により、2019年の12月にスタートしました。コロナ禍に見舞われましたが、鎌倉女子大学の学術研究所助成研究の一環として「若者支援プログラム」の過去の参加者にアンケートとインタビューを行い、2022年3月にはワークショップ「土から絵具を作る」が誕生しました。K2インターナショナルには調査全般にわたり多大なご協力をいただきました。また、シンポジウムの開催と本報告書の発行は、横浜美術館のご協力と、

公益財団法人前川財団の家庭・地域教育研究助成により実現しました。

横浜美術館と K2インターナショナルグループについて

横浜美術館とK2インターナショナルは、ともに30年以上にわたり大都市・横浜に根差し、それぞれのミッションを果たしてきました。K2インターナショナルは、不登校や引きこもり等の経験をもつ子どもや若者の就学・就労から生活、文化面にまで、人間味にあふれる支援を行っています。街中のパン屋やお好み焼き屋の出店にはじまり、養蜂、ファームでの農業、ときにミュージカル上演や美術展の開催など、ユニークで多彩な事業を展開する出色の組織です。

一方で横浜美術館は言わずと知れた有数の美術館でありながら、「市民の美術に関する学習、創作活動等」への寄与を条例の第一条に掲げています。一流のコレクションや第一線の調査研究のもとで、華やかな展覧会事業と並行しつつ、「市民とともにある美術館」を体現した教育普及事業が展開されてきました。「若者支援プログラム」を行っているのは、造形プログラムが中心の「子どものアトリエ」や「市民のアトリエ」とは別のチ

ームとなる、「教育プロジェクト」です。市民への豊かな美術館体験の提供を目指して、市民ボランティアの育成や、学校の教師、また中高生や障がいのある利用者を対象とした教育普及事業を展開しています。その中で「若者支援プログラム」は、教育プロジェクトのミッションと日常の活動から派生しているものの、美術館はもとより社会や人との関係が途絶えがちな若者に向けて、アートや美術館に触れる回路として開かれた、チャレンジングな取り組みです。この意味で「若者支援プログラム」は、横浜の地で、若者支援の草分けのK2インターナショナルと、かたや美術館教育の泰斗である横浜美術館が出会うべくして出会って生まれたプログラムと言えるでしょう。

ワークショップ「土から絵具をつくる」 について

シンポジウムでは、東京都三鷹市で50年近くも若者支援を行い全国に知られる文化学習協同ネットワークの佐藤洋作さんをシンポジストに迎えました。佐藤さんが代表を務める団体は、リスクを抱えた若者が「自分らしく輝くために、学ぶ力を育てる、働く力を身につける」ための学習の場や居場所、また社会参加や就労支援の場を運営しています。吉祥寺界隈の喧噪を抜けた井の頭公園の向かいに拠点を構え、その並びに天然酵母などの素材にこだわるパン屋や、本格的なDTPを行うラボを立ち上げています。神奈川県相模原市に広がる「風のすみか農場（ニローネ）」では、若者がボランティアと力を合わせて野菜や小麦、ブルーベリーを育てています。

実はワークショップ「土から絵具を作る」は、横浜美術館の端山さんがK2インターナショナルと文化学習協同ネットワークが営むファームから着想を得て、「土」がモチーフとなりました。「つくる」体験の過程で、また大地や人いきれの中で「生」を感じる意義も、大きな着目点となりました。佐藤洋作さんと私たちを結びつけたのは、若者支援の分野で佐藤さんとともに歩み、調査研究も行ってきたK2インターナショナルの岩本さんですが、このようにシンポジウム自体が新たな出会いと化学反応をもたらす機会となりました。

シンポジウム当日と報告書について

シンポジウムは、コロナ禍のためオンライン開催となったものの、若者支援や美術館の教育普及に関心をもつ50数名の方々の参加をいただきました。横浜美術館の会場には教育プロジェクトのスタッフが総出で前日からスタンバイし、K2インターナショナルの施設ともオンラインでつながりました。まずは、松井美鈴教育普及グループ長にあたたかい開会挨拶をいただいた後、梨本がシンポジウムの趣旨と次第を説明しました。日本補助犬情報センターによる字幕表示がなされ、会場には「若者支援プログラム」参加者の斎藤さん、報告書の編集を担当するDTPユースラボの高橋薫さん、中村一馬さんも同席されました。

この報告書は当日の語らいの丁寧な収録に努めました。シンポジウムを見てくださった、また報告書を読まれた皆さまとのさらなる情報・意見交換の機会を期待しています。

登壇者プロフィール



はやま さとこ
端山 聡子

横浜美術館 (主任エディタ
ター・主任学芸員)

2013年9月より横浜美術館教育普及グループ教育プロジェクトに所属。ボランティアがおこなう活動、鑑賞教育に資するプログラム、美術館と学校が連携しての事業などを担当。関心のあるテーマは博物館の教育普及、教育普及を軸にした博物館の在り方や活動内容、および近現代の日本美術。



ことう みなみ
古藤 陽

横浜美術館 (鑑賞教育エ
ディタター・学芸員)

2019年より横浜美術館教育普及グループ教育プロジェクトに所属。ボランティアや教員など美術に関わる人材の育成や、中高生に向けた鑑賞教育プログラム等の企画・運営等を担当。専門は認知科学。現在は大学院で、美術体験の日常のものの方への影響に関する研究を行っている。



いわもと まみ
岩本 真実

K2インターナショナル
グループ

1997年よりK2の海外プログラムボランティアをきっかけに参画。国内外で不登校児との共同生活、就労支援のためのレストラン、ブックショップ等を立ち上げ多数。若者自立塾、若者サポートステーションなど、行政・企業・地域と連携した若者就労支援事業の展開に関わる。



なしもと くぼうち かな
梨本(久保内) 加菜

鎌倉女子大学 児童学部教授

学校教員と学芸員の養成に携わる。青少年の芸術文化活動を豊かにするための国内外の博物館等の公共施設や地方行政、民間組織、専門職のあり方に関する調査研究を続けている。専門は教育学(教育行政、社会教育、博物館教育)。

シンポジウムゲスト



さとう ようさく
佐藤 洋作

NPO 法人文化学習協同ネッ
トワーク 代表理事

学生時代から三多摩地域を中心に父母運営の塾づくり運動などに関わる。以後、不登校のためのフリースクール、ひきこもりやニートなどの若者のための支援、困窮家庭の子どもたちの学習支援を展開。著書に「君は君のままがいい」「アンダークラス化する若者たち」等。

シンポジウムの記録

報告とディスカッション

2022年5月14日(土)に横浜美術館仮事務所(PLOT48)からオンライン配信されたシンポジウムに登壇した5名による報告と論点整理、そしてディスカッションの内容が、すべて収録されています。

報告 1

生きづらさを抱えた若者と
アートをつなぐ

登壇

端山 聡子

横浜美術館 教育普及グループ
教育プロジェクトチームリーダー

今日は若者支援のプログラムとして、横浜美術館の教育プロジェクトがどのようなことを行ってきたのかをごく簡単にご紹介しつつ、議論を進めてまいりたいと思います。私は「生きづらさを抱えた若者とアートをつなぐ」というタイトルでお話をさせていただきます。

横浜美術館の教育プロジェクト

横浜美術館の教育普及グループは、子どものアトリエと市民のアトリエという造形教育センターのチームと、教育プロジェクトという後発の新設のチームで構成されています。私の所属する教育プロジェクトでK2インターナショナル、つまり若者支援の事業を担っている会社（団体）と組んでプログラムを実施してきました。この若者支援プログラムでは、生きづらさや社会的自立に困難を抱えた若者たち、これまではK2インターナショナルの利用者を中心に、そのほかの若者支援の施設の利用者なども対象としてきました。具体的にはひきこもりの方や大学に行けなくなった方など様々な生きづらさを抱えた方が、参加してくださっているプログラムです。2014年から始まり2022年の3月まで、23種類のプログラムを実施してきました。

美術館に来館して行く場合、あるいはアウトリーチで出かけていく場合を組み合わせながら、毎年2〜3回のプログラムを実施してきました。

プログラムの特徴—観察と鑑賞

ヨコハマトリエンナーレ2014の時にスタートしまして、最後は2022年3月に「土から作る絵具」という絵具作りのアウトリーチのプログラムまでなのですが、その中から、具体的な事例をあげてごく断片をかいつまんで、このプログラムの特徴についてお話いたします。

このスライド(写真1)は2015年のものですから、始まって2年目です。横浜美術館のコレクション



写真1：作品を見に行く前の描写の練習として、実際のみかんを前によく観察し、記述する（ディスクリプション）。色や形など見て描写できるものもあれば、香や味などコタツの上のみかんの話などもあった。

横浜美術館の若者支援プログラム実施一覧（2014～22年3月まで）

2014年10月	「ヨコハマトリエンナーレ2014の鑑賞 & トリエンナーレポスターから—消しゴム版画の制作」（会場：横浜美術館）
2015年2月	「横浜美術館コレクション展の鑑賞 & 言葉のデッサン」（会場：横浜美術館）
2015年5月	「石田尚志展の鑑賞 & マスキングテープで『私の線』を考える」（会場：横浜美術館）
2015年9月	「蔡國強展の鑑賞 & 言葉で《壁撞き》を描く・つくる」（会場：横浜美術館）
2016年2月	「横浜美術館コレクション展の鑑賞 & グルーガンでつなぐ+広がる+積む」（会場：横浜美術館）
2016年5月	「複製技術と美術家たち展の鑑賞 & 言葉のコラージュ・絵のコラージュ」（会場：横浜美術館）
2016年12月	「写真表現を考えてみよう、カメラオブスクラでみてみよう」（会場：よこはま南部ユースプラザ）
2017年2月	「篠山紀信展とコレクション展の鑑賞」（会場：横浜美術館）
2017年9月	「ヨコハマトリエンナーレ2017について & 『優美な死骸』を体験する」（会場：よこはま南部ユースプラザ）
2017年10月	「ヨコハマトリエンナーレ2017の鑑賞 & 折り紙で紋切りをやってみよう」（会場：横浜美術館）
2018年2月	「石内都展の鑑賞 & 和紙で時間を表現する」（会場：横浜美術館）
2018年9月	「モネ展の鑑賞 & 日常の隠れた姿を写真でさがす」（会場：横浜美術館）
2018年11月	「モノタイプを体験してみる駒井哲郎展について」（会場：よこはま南部ユースプラザ）
2018年11月	「銅版画デモンストレーション & 駒井哲郎展の鑑賞」（会場：横浜美術館）
2019年2月	「イサム・ノグチと長谷川三郎展の鑑賞 & 紙の彫刻」（会場：横浜美術館）
2019年6月	「Meet the Collection展の鑑賞 & ディスクリプションをしてみる」（会場：横浜美術館）
2019年11月	「田中敦子作品から—繰り返し描いて埋める小さな紙」（会場：よこはま南部ユースプラザ）
2019年12月	「横浜美術館コレクション展の鑑賞 & 美術館をナナメから見よう」（会場：横浜美術館）
2020年9月	「ヨコハマトリエンナーレ2020を見に行こう」（会場：オンライン）
2020年9月/10月	「ヨコハマトリエンナーレ2020を鑑賞しよう」（会場：横浜美術館）
2021年1月	「みんなの持ちモノを展示してみよう」（会場：よこはま南部ユースプラザ・ユースワークふじさわ） オンラインで2ヶ所を中継
2021年2月	「トライアログ展で作品の共通点・違う点を探そう」（会場：横浜美術館）
2022年3月	「土の絵具で描かれた絵の話、土から絵具をつくる+ためし描き」（会場：よこはま南部ユースプラザ・ユースワークふじさわ） オンラインで2ヶ所を中継

若者支援プログラム参加者調査、学会発表、シンポジウム開催ほか

2017年3月	「第12回全国若者・ひきこもり協同実践交流会 in 東京」の分科会「横浜美術館での『美術をみる/つくる』プログラムについて」（端山聡子）
2020年4月	プログラム参加者を対象としたアンケート調査（4～5月、30名が回答）、対面によるインタビュー調査（6～7月、8名）
2020年9月	「横浜美術館とK2インターナショナルグループの協働による『若者支援プログラム』の意義」日本社会教育学会 第67回研究大会自由研究発表（梨本加菜、端山聡子）オンライン
2021年5月	「若者支援プログラムの意義に関する調査関係者オンライン報告会」
2022年5月	若者支援プログラムシンポジウム「若者支援プログラムを解体し、創造する：9年間の歩みとこれから」オンライン、参加者58名（会場：横浜美術館仮事務所PLOT48）
2022年秋	2022年5月のシンポジウム報告書および若者支援プログラムについての報告書発行（予定）

その他

2015年12月	「職業人セミナー（よこはま南部ユースプラザからの依頼）」（会場：よこはま南部ユースプラザ）
2016年3月	「職業人セミナー（よこはま南部ユースプラザからの依頼）」（会場：よこはま南部ユースプラザ）

この二つはよこはま南部ユースプラザからの依頼レクチャー（テーマは美術館の役割と働く職員の仕事内容）だが、実質的には最初のアウトリーチであった。

展という所蔵作品展を題材に鑑賞をするプログラムです。鑑賞という言葉でくくってしまうと、皆さんがイメージしている鑑賞とは少し違うやり方をしているかもしれませんので、説明したいと思います。ここに参加する若者たちが映っています。展示室で中上清さんの作品を前に、何かメモしているのは参加者の若者たちですね（写真2）。

最初にこの2014年、15年の頃に、特に「みる（鑑賞）」ということについて、どんなふうに行うかと考えて、「観察」から始めています。参加する若者たちはなかなか美術と馴染みがない方々がほとんどでした。美術館に実は来たのは初めてですとか、美術の授業、図画工作も苦手でしたとかいう方たちが多く、まず「鑑賞」って言ったときに、作品について何かを言わなくてはならない、この美的な素晴らしさを語らなければいけないのではないかと、その良さを自分にはわからないけどどうしたらよいのだろうというプレッシャーを感じるのが普通だと思います。美術作品を前にすると、若者に限らずそういうことはあるのではないのでしょうか。この時は季節が冬だったのかもしれませんが、私達は机の上に「みかん」を出して、その色とか形とか、細部にわたって観察して、これを言葉に置き換えてみましょうってところからスタートさせました。

参加者の皆さんがみかんを「観察する」ってことがベースなので、皮の表面のどこどこであるとかへたのところのへこみであるとかを観察して、その皮の色や質感などをメモして言葉にする。

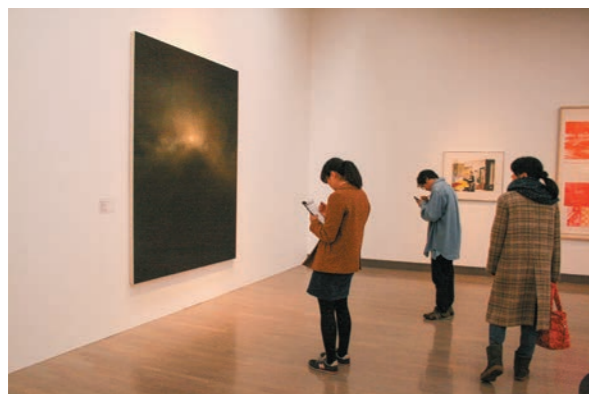


写真2

今度はみかんを剥いてみて、香りをかいだりとか、あと食べてみて味について話したりしました。

自分自身が持っているみかんの思い出みたいなものがあれば話をしてもらって、みたいなことを練習した後に展示室に行って、展示室の作品もみかんと同じように観察からスタートしました。自分で見たものを言葉にしてくださいってようなお話をしてやっていただいたのがこのプログラムです。

これは鑑賞の最初の入り口として、こんなことを割とよくやっていたという例として挙げさせていただきました。

ワークショップの紹介

—ケース①2015年の石田尚志展 線をのぼす

次のスライドは石田尚志さんというアーティストの展覧会を観覧しています（写真3）。映像の作品で、線がどんどん伸びていくような作品もあれば、逆に線がどんどん消滅していくような作品もありました。いずれも線というものに注目しています。私たちに身近な線である電気コードとか、鉛筆で書いた線とかそのほかのいろんな線についてや、絵の中の線にまつわるお話もした後に、展覧会を見に行きました。作品の中で線がぐんぐん伸びたり消えたりすることを観察して、言葉にしてもらいました。そして帰ってきて、自分の、私の線を考えてみようということで、マスキングテープを使ってアトリエの床や壁や廊下などに自由に、自分で線を貼って繋いで延ばしていくってようなことをやっていただきました（写真4）。最後には延ばした線の撤収も自分でやって終わるというプログラムでした。

—ケース②2019年のイサム・ノグチと長谷川三郎展

それから次は「イサム・ノグチと長谷川三郎展」



写真3(左): チームに分かれて石田尚志展をみにいく。映像作品には線がぐんぐん伸びていくものもあれば、逆に消滅していくものもあった。写真4(中央上): アトリエに戻り、色とりどりのマスキングテープをつかって壁や廊下に線を這わせていく。写真5(中央下): イサム・ノグチ《庭の要素》を話しながらみる。彫刻が立っていること、石の配置も考えてなされていることに着目した。写真6(右): 長谷川三郎作品の屏風に参加者と話しながらみる。黒い線や四角い模様の配置に着目する。

という展覧会でやったプログラムです。

画家の長谷川三郎と、横浜美術館のコレクションとしても重要な作家であるイサム・ノグチのある時期の作品群にフォーカスした展覧会でした。このスライドはこのイサム・ノグチの大きな石が立っている彫刻をみんなでみて、言葉を出しているところかなと思います（写真5）。

これも作品をみんなでみている場面ですね（写真6）。長谷川三郎の作品はたとえば屏風の上に、墨で棒みたいな線とスタンプみたいな四角い形とU字型の丸が半分に切れたような形、そして短い線がリズムを伴って配されている作品で、それをみんなで眺めて話をしている。先ほどのみかんの観察じゃないですけど、作品を観察して言葉を出しているという場面です。チームごとにボランティアさんや職員が入って一緒に話をしています。

配置する

この回には、イサム・ノグチと長谷川三郎という2人の作家の作品に関するワークショップをしました。先ほどの屏風に貼られた白い和紙の上にもみえる作品から発想しました。いっぽう

彫刻もまたどこにどのように置くかということも常に考えるものです。実はこれは作品を観る前のワークショップですが、白い紙の上に黒い石を置くのと、黒い紙の上に白い石を置くことの違いを選んで取り組んでもらいました（写真7）。使う石の数も自由にして、配置をするというテーマでワークショップをしました。どんな配置でも正解も間違いもなく、みんな考えながらも思い思いに黒い石か白い石を取って置いていました。紙の上に石を配置するとしたらどんなふうになりますか？という問いかけですが、これは自分の部屋の中にどんなふうにも飾られているかとか、自分の部屋の棚の上に、お気に入りのものをどんな



写真7: 展示をみる前のワークショップ。白い紙の上に黒い石を配置する。

ふうに並べるかみたいなことと繋がります。配置をするっていうことにも自然に個性が表れるため、後でみんな比べて見てみるということもやりました。

紙を立てる

そして、彫刻が立っていることについてのワークショップをやりました。横浜美術館が所蔵するイサム・ノグチの彫刻から発想しました。ステンレスの板を立てて折り紙みたいに折った形で、しかも自重で立っている彫刻があります。バランスをとって立たせているのですが、これを紙に置き換えてみました。いちまいの紙、そのままでは立たないのですが、いちまいの紙を折って立たせてみようというワークショップでした。平面の紙を立体にしてみよう、思いつく限りたくさん作ってくださいという内容でした。どうしたら紙が立つのだろう、あるいは立つということはどんな形だったら立つと言えるだろう、これは立つと言え



写真8(上)：立たた紙からいくつかを選び、チームごとに大きな黒い紙のうえに配置していく。写真9(下)：紙を折って、選び、配置したことについて発表した。

るのだろうか、と考えながらやっていました。A4のコピー用紙を立てせるアイデアがたくさん出てきました。

A4の紙で幾通りも作れるのですね。いろいろな立ち方があって、紙を手でちぎってもいいとか、丸めるのもありかなど、アイデアが出てきました。チームごとの机の上に出てきたアイデアの形を並べていきました。そこからいくつかを選び、今度は黒い大きな紙の上に、立たせた白い紙を配置していくことをやりました(写真8)。スライドの場面は、若者たちがチームになって、自分たちが作ったものの中から選んで、配置して他のチームの人にどんな風に選んで配置したかを話しているという場面です(写真9)。最初の紙の上に石を置くワークショップと重ね合わせているような内容なのですが、今度は共同作業でやりました。紙を立てせる作業では個人でしたが、大きな黒い紙の上に配置を考えるのはチームごとに話しあってもらいました。こんな配置でこんな風に見せようと思ったみたいなことをチームごとに発表しているのを他の参加者が聞いているという場面です。

ケース③2019年のアウトリーチ 行為の繰り返しで描く

そして、これはよこはま南部ユースプラザにアウトリーチに行った時の場面です。名刺サイズの紙に行為、動作ですね。点々でもいいし、丸でもいいし、四角でもいいし、同じ行為を繰り返して紙を埋めてみよう、というワークショップです(写真10)。これは田中敦子さんという横浜美術館の収集作家の作品から発想したものです。丸と線だけで作られた大きな作品です。いろんな色の丸が重なっていて、それが線で結ばれていて、非常にカラフルな線が縦横に走っている、田中敦子さんはこういう作品を約30年間描き続けた方です。

ここでも様々な行為の集積によって紙の埋め方がさまざまにあったので、それをみんなで見るみ



写真10：点を打つ、線を引くなどの同じ行為を繰り返して、名刺サイズの紙を埋める。

たいなことをやりました。そして横浜美術館に来て、展示室で田中敦子さんの作品も鑑賞するというのもセットにしたプログラムだったと思います。

ケース④2022年のアウトリーチ 土から絵具をつくる

それから、最後は一番最近のワークショップです。現在横浜美術館は休館中なのでアウトリーチで行いました。K2インターナショナルは横浜の根岸という場所にファームがあり、そのファームの土から絵具を作るというのを実施しました(写真11)。なぜファームの土かといいますと、今日のシンポジウムをやることが決まった後だからです。これからご登壇いただく佐藤洋作さんも神奈川県津久井という場所で農業をなさっています。



若者支援に関わる方たちはその活動として農業やファームをやっているという共通点があったので、若者たちが農業でかかわる土を題材にして絵具をつくることで、今日のシンポジウムに繋がるワークショップになるかなと思って、取り上げてみました。畑の土っていうのは普段は耕すものとして、あるいは雨の日にくちやくちやくして汚れるようなものとして、イメージされることもありますが、土から絵具を作ると、土が「色」として見えてくるかなという意図でした。「茶色ってこんな色だったっけ？」と確かめることも含めて、土が畑のものだけではなく、色として自分が描くための材料になるっていうことを体験できるかという意図でこのワークショップをやりました。このワークショップの内容は、土で描かれた絵のレクチャーと土から顔料を作ること、土の顔料とメディウム、つまり「のり」を練り合わせて絵具を作ること、絵具を使って試し描きをすること、そして最後は作った色に名前をつけるというものでした。

ワークショップの時間は2時間半ぐらいだったので、顔料を作るところまでは横浜美術館で準備していききました(写真12、13)。元の畑の土と顔料も比べてみる、とか自分の家から身近な土も持ってきてもらって比べてみるとか、あるいは世界のいろいろな色の土の顔料を持って行ったので、比較してみるということもやりました。土から絵具を作るプロセスとして、水簸すいひという水を使って



写真11(左)：根岸のファームの土を採取するため、1メートルくらい掘る。写真12(中央)写真13(右)：横浜美術館仮事務所(PLOT48)で顔料を作る。



写真14(左上)：よこはま南部ユースプラザとユースワークふじさわをオンラインでつなぎ、顔料とメディウムを練り合わせる作業を同時におこなう。写真15(左下)：ユースワークふじさわでのワークショップ風景。写真16(右上)：根岸のファームの土を精製した顔料とメディウム(展色材)を練り合わせる。写真17(右下)：つくった土の絵具で試し描きをする。

粒子の大きさを分ける方法で顔料をつくっていきます。顔料となる土の粒の大きさを揃えることで、色がくっきりしてきます。このレクチャーにおいて、人間が古くからこの土の絵具を使ってきたということをお話しました。人間が絵を描き始めたときに、最初に使った絵具は土からつくった絵具だろうと思われます。というのは、例えば皆様よくご存知のラスコーの壁画も土から作った絵具で描かれていて、あれは天然のフレスコ画なのですが、長い時間を経て現代まで伝えられています。ポンペイの壁画のフレスコ画も土の顔料で描かれています。土というのは色材としても人間が絵を描き始めたときから使っている材料、そしてそれは畑の土でもあり絵具の顔料の土でもある、ということで、絵具を作るというワークショップをして、試し描きをするところまでやりました。

色に名前を付けるということもやったのですが、日本の色にはさまざまに素敵な名前がついています。例えば茶色っていうネーミングもそうで

すけれども、うぐいす色とか枯葉色とか何かにたとえた言い方もするので、参加者の若者たちに名前をつけていただいたら、ファームの土の色は、濃いほうじ茶色だとかスパイス色だとか、根岸の色だから根色だとかっていう名前をつけて下さいました。

このプログラムでは、二つの若者支援施設をZOOMで繋いだので、ひとつの施設は実地でやりましたが、もうひとつの施設でのレクチャーは画面を通して聞いていただいています(写真14、15)。写真16は指で絵具を練り合わせている場面。写真17は、練り合わせて絵具にしたのちに筆に絵具を含ませて線を引いている場面です。

プログラムデザインのポイント

プログラムデザインのポイントに移りますが、今まで紹介してきたプログラムは、私達教育プロ

ジェクトの職員が考案しています。どうしたら参加者の若者に適した内容になるかなということを考えてプログラムをつくります。たとえば美術史のことは、ほとんど話さない。田中敦子さんが具体美術の作家ということはほとんど喋らなくて、作品そのものと向き合っていただくような内容にしています。作家の経歴についてもほとんど話をしない。知識がないと絵は見られないと思っている方も多いので、知識がなくても、向き合うことで、たとえば観察するだけでいろんなことがわかるし、理解できるっていうことを示すようにしています。全く話さないわけではないのですが、最低限の内容にしています。

みる・つくる・はなす・きく

それからプログラムの中に「みること」「つくること」「きくこと」「はなすこと」っていうのを、様々な形で組み込んでいます。これは意識的にやっていて「みる」っていうのはもちろん作品を見ることもですけど、他の方が作った制作物を見る、自分の作ったものをよく見るってことも含めて「みる」ことで、「つくる」っていうのは作品制作もそうですけれども、作る活動をいくつか組み合わせることが多い。「きく」はレクチャーとして職員の話を聞く場合もありますし、他の人の発言をよく聞くということがあります。それから「はなす」はもちろん参加者自身が話すというようなことですね。こういう内容を組み込んで、プログラム中に何度もいろいろな局面で「みる」「つくる」「はなす」「きく」ということが起こるプログラムを作っています。

参加者の若者は言葉が次々出てくる方たちではないので、ゆっくり話していただく、あるいはその言葉を口に出すまでに時間がかかる時はそれを待つ時間もあります。私達職員は聞くことに、耳をそばだてて小さな声を聞いて相槌を打つ、会話をするというのを重視していて、職員の役目はほとんど「きくこと」に尽きる。ボランティアさ



写真18(上)：よこはま南部ユースプラザでの田中敦子作品を使ったアウトリーチの様子。写真19(下)：参加者が小さな紙に描いた制作物を机の上に並べてみる。

んもそうですけど、聞くことを中心にして若者が話した言葉や書いた言葉を受け止めて、会話をする、返すっていうようなやりとりをする。いつも待つ時間が必要なので、自然に辛抱強く待つことを大事にしています。

プログラムの運営

このプログラムを運営するときに、美術館職員が先生という立ち位置にならない。できるだけ先生と生徒のように教える側と教わる側という関係を作らないように運営しています。職員も自分と地続きで若者たちに繋がっていきけるような、ボランティアさんもそうですけど、そういうような形でグループワークをプログラム運営の中に取り入れていっています。それから進行に余裕を持たせて、急かさないでゆっくりできるように、慌てないでいいんだよということを伝えて、ゆっくりやれるような時間的な余裕を持たせて内容を組み立てます。

プログラムを作るときには時間をかけて職員同士で事前に内容をあれこれ検討します。展覧会を見てその中のどの作品をヒントにしようか、みたいなことも含めて職員同士でアイデアを出し合って内容を詰めていきます。若者支援施設に通う当事者の方にもインターンとして来ていただいて、ある程度まで作ったプログラムをインターンにプレゼンをしたこともありました。それは当事者の若者たちにこの内容で届くだろうかっていう検討のためですが、何回かやりました。プログラムを作るときには事前の準備がすごく重要ですので、何度も試作したり、プログラムの流れが自然に展開しているかどうかを確認したり、そもそもプログラムの趣旨に沿う内容であるかどうかを複数の目で検討し、議論し、試作した上で実施をすることにしていきます。プログラムデザインをすること自体がひとつのワークショップであるように時間をかけてあれこれ考えることも含めて楽しく準備をしているように思います。

それから「みる」と「つくる」を行ったり来たりすること、「往還」と言ったりするのですが、みることを鑑賞というふうに言ってしまうと大きさとか、難しく考えちゃう人もいますので、観察という言葉を使います。子どもの頃の夏休みの宿題だった「朝顔の観察」と同じような意味での観察です。言葉にすることができる、その対象が何であるかを、自分なりに定義をするということに繋がっていくので、見ているものが何なのかっていうのを言語化してもらうということは必ず取り入れています。それからその次は思ったこととか感じたことを言葉にってもらうということで、いきなり感じたことを聞くのではなく、プロセスの部分も含めて鑑賞と呼んでいます。それから制作は「行為の連続による制作」という同じような行為を繰り返して作っていくことが多い。風景を描きましょうとか、そういう何か最終形態がイメージできるものではなくて、とりあえず始められるという制作のスタイルをいつも取っていて、それは逆に言うと、探求的に制作を重ねるこ

とができるということですね。

たとえば、線を延ばすことについても、マスキングテープを少し貼ったら、その次どうしようかみたいなことを、その場で考えて、やったことが次の行為を誘発することで、あらかじめ最終形を想定できない、最終形態を目指さないという制作の仕方をしていて、それは探求的な制作だと思っています。つまりどういうことかって言うと、自己表現につながる制作ということ。自己表現というよりは、トライアル（試し）を重ねている時間を制作としています。制作では、話をしないで黙っていますので、皆さんが黙々と作ったり描いたり作業する時間になります。大きく分けて「みる」と「つくる」ということを組み込んだプログラムなので、横浜美術館らしさが表れている部分かなと思います。

それから個人性と共同性ということですが、個人で「みること」「つくること」を行うということと、複数人で「はなす」ことを通じて、また他の人が「みること」「つくること」をどんなふうにしたのかってことを常に共有するというような連なり具合を大事にしていて、個人と複数人の取り組みが何度も繰り返される、そしてシェアされるという内容にしています。このような特徴が、実施してきたプログラムにはあるかなと思います。

プログラム評価としてのインタビュー

最後に参加者へアンケートおよびインタビュー調査を行ったことを少しだけ紹介します。私が強く印象に残ったところですが、参加した数年前のプログラムの内容を細部まで記憶していました。一般的な講座の参加者以上にしっかりと記憶してくれているということに関して、私は大変驚きました。このインタビュー調査の内容は貴重な記録なので、後日の報告書で詳しくレポートしますので、どうぞご覧ください。

以上でお話をおしまいにさせていただきます。

これまでのプログラムの記録(抜粋) Part 1

2015年2月「横浜美術館コレクション展鑑賞 & 言葉のデッサン」(会場：横浜美術館)



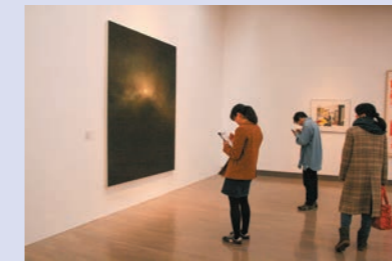
作品をみにいく前に練習として、実際のみかんを前によく観察し、言葉で描写をする(ディスクリプション)。色や形や、香りなどその場で感じて描写できるものもあれば、コタツの上のみかんの話などのみかんの記憶についての話などもあった。



みかんを剥いて、感触や香りを確かめる。



チームに分かれて作品をみにいく。みかんと同じように作品を観察してみる。



観察したことを言葉にしてメモする。



観察したことを言葉にして短冊に書く。

参加者の言葉を短冊に書き、作品ごとに並べてみると、それぞれの作品の特徴が言葉の連なりから見えてくる。

2015年9月「蔡國強展の鑑賞 & 言葉で《壁撞き》を描く・つくる」(会場：横浜美術館)



展示室で蔡國強《壁撞き》の大きな作品をみる。99頭の剥製の狼が列をなして飛び、その先にあるガラスの壁に激突してもんどりうち崩れて落ちていくという場面の作品。



狼が声を発するとしたら、どんな声や言葉だろうと想像して書きとめる。狼の声や言葉を聞くために顔を近づけている。



この狼と向かい合いながら、書きとめる。



部屋にもどり、声や言葉を色紙とカラーペンで表現する。文字の形態や大きさも工夫して表わした。



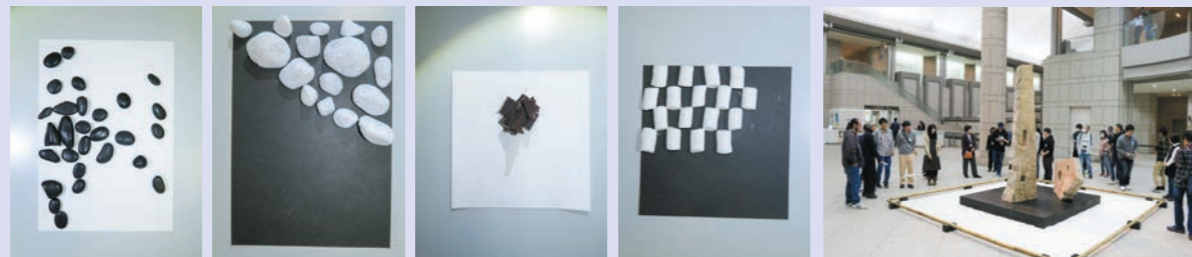
展示室の99頭の狼の姿を絵として表した下図に声や言葉の紙をに張込む。



制作した狼の声や言葉を貼り終え、完成。

これまでのプログラムの記録(抜粋) Part 2

2019年2月「イサム・ノグチと長谷川三郎展の鑑賞 & 紙の彫刻」(会場：横浜美術館)



展示を見る前、紙の上に石を配置する。

白い紙の上にチョコレート配置してから食べる。黒い紙の上にマシュマロを配置してから食べる。

イサム・ノグチ《庭の要素》を話しなが
らみる。彫刻が立っていること、石の配置
も考えてなされていることに着目した。



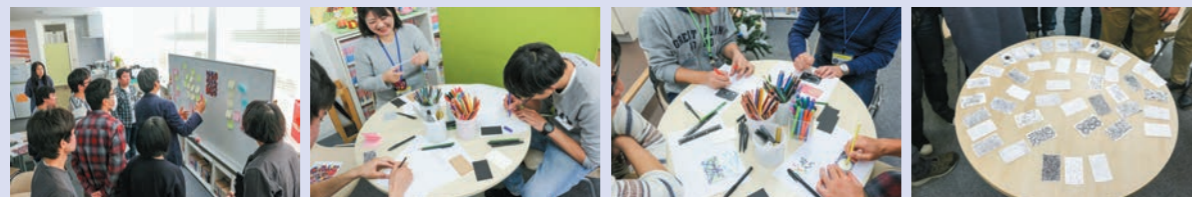
長谷川三郎作品の屏風を参加
者と話しながらみる。黒い線や
四角い模様の配置に着目する。

展示室からもどって、一枚のコ
ピー用紙を折って立てる方法を
思いつく限り試す。

立てた紙からいくつかを選び、
チームごとに大きな黒い紙のう
えに配置していく。

紙を折って、選び、配置したこ
とについて発表した。

2019年11月「田中敦子作品から一線り返し描いて埋める小さな紙」(会場：よこはま南部ユースプラザ)



田中敦子作品をきっかけにした
ワークショップをおこなう。作品
の図版をみんなで見る。

点を打つ、線を引くなどの同じ行為を繰り返して、名刺サ
イズの紙を埋める。

参加者がそれぞれ制作した紙を
机に広げてさまざまなものが制
作されたことを見る。

2021年1月「みんなの持ちモノを展示してみよう」(会場：よこはま南部ユースプラザ・ユースワークふじさわ)



それぞれの持ち物から共通するある視
点を取り出し、展示をする。

展示品に説明をつける。

チームで発表している様子。

報告 2

若者支援施設における展開 ～参加者の声～

登壇

岩本 真実

K2インターナショナルグループ

K2インターナショナルグループのはじまり

K2インターナショナルグループ(以下K2)は、生きづらさを抱える若者の自立・就労を支援就労を支援している民間の団体で1989年から活動しています。本部は横浜・根岸(磯子区)に、海外はニュージーランド、オーストラリア、韓国、国内では宮城県石巻にも活動の拠点をしています。

活動当初は10代の不登校の子ども達に、学校ではできないようなおもしろい、すごい体験してもらいたいと、ヨットに乗って南の島へ外洋航海したり、ポナペやフィジーなどの島で暮らし、真っ黒に日焼けして元気になります。また家に戻ると引きこもる子ども達もいました。そこで長期に支援を継続するために横浜に拠点を

つくり、お好み焼き屋さんと共同生活の場を作りました。不登校の子ども達には学校に戻すのではなく、生きるための力をつけることや仲間や信頼できる大人との関係づくりをする事が大事だと考えて活動をしてきました。様々な理由で学校や社会に出られなくなってしまった子ども達が人と関わりを取り戻すきっかけとして、海外での生活やヨット航海などをしてきました。

K2インターナショナルグループの現在の活動

現在は年齢層も幅広くなり、自立・就労支援が中心になっていますが、様々な理由でひきこもったり、傷ついた子ども達、若者たちが①充電期間(楽しい経験や受け入れられること) ②生活スキルを養う ③働く為のスキルを養う ④自立・就労 ⑤支援される側からする側に というステップで元気になっていくと考えています。K2の活動範囲も年齢は10代から40代になる方まで、また子育て支援、学童、居場所、学習支援、就労支援、共同生活、福祉的な支援、働く場づくり、農業、海外や地方での活動など幅広く活動していますが、すべての活動は生きづらさを抱える若者が元気になること、生き生きと尊厳を持って暮らせることを目指す為にできた事業です。





地域資源と連携しながら生きづらさを抱える若者が共に生きる場をつくっています。



パン屋のオヤジ



お好み焼きころんぶす



にこまるソーシャルファーム



アロハキッチン



ひとりひとりに合わせた
多様な住まいと居場所

現在横浜市磯子区を中心に、住まい、働く場、居場所や相談室などを地域と緩やかにつながりながら作っています。横浜には支援している若者やスタッフ家族などが100名以上居住し、働いています。

横浜美術館との協働プログラムについて

横浜美術館との協働プログラムは、よこはま南

部ユースプラザ、湘南横浜若者サポートステーション、ユースワークふじさわの三か所で実施してきました。

この3つの施設は相談者本人や家族からの相談を受ける場所として、最初に訪れるところです。ゆっくり相談を聞き、外出する事の練習として来所したり、仲間づくりのためにセミナーに参加したり、社会に出るための具体的なスキルを学んだりする事ができます。

長く何十年ものひきこもりから出てくる人もいれば、学校でいじめなどがあり、行けなくなってしまった子ども達もきます。働くことや自立に悩む若者への支援施設となっていますが、人とのかわりやコミュニケーションに苦手意識を持つ方が多くいます。

ですので、何かしら表現活動を取り入れるワークショップなどはこれまでもやってきました。非言語のコミュニケーションは必要ですが、専門家やアーティストさんと一緒にやることには難しさを感じることも多く、そういう中でこの美術館のプログラムは本当にお互いにいろんな学び合いをしながらゆっくりと事業を育ててこれたのが良かったと思います。

このプログラムも気づけば9年間やっているとのことで、振り返ってみて横浜美術館の皆様にはとても感謝しています。このようなアートを紹介したプログラムはなかなかできないので、今回まとめをつくる事で今後も若者支援の現場で同じようなプログラムをやりたい方の手がかりになればと思っています。

美術館プログラムができるまで

ヨコハマトリエンナーレ2014の時がプログラムの最初の回でした。参加した若者は全然美術館には興味も関心もないって感じだったんですけども、スタッフに誘われて行ってみたら、自分の考える美術とは全然違う現代アートで、自分の

感覚にも通じるような体験ができたようで、すごく面白かったという感想を話していました。街の中の美術館という施設が身近でない若者たちにとって、このプログラムを通して、行ってみようと思うきっかけになっていると思います。

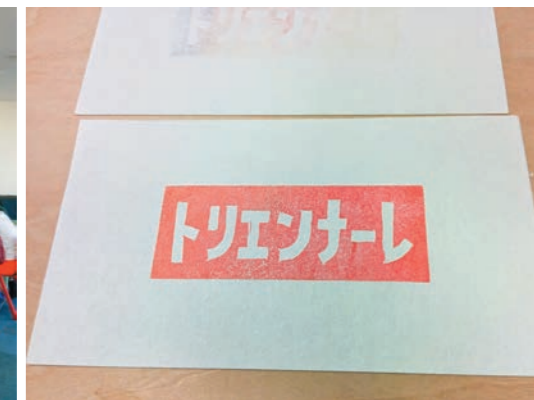
また、このプログラムはただ作品を鑑賞するだけでなく、実際に手を動かしたり、考えたり、話したりという事がセットになっています。その工夫がとても参加しやすいところだと思います。

毎回同行するスタッフも刺激を受けて帰ってきます。

ですが、はじめから今のようなかたちではなく、お互いに試行錯誤で作ってきました。たとえば、最初の回では消しゴムはんこを作ったんですけども、実際にやってみると思いのほか制作に時間がかかる若者がいました。実際に考えたり行動に移すのに時間がかかるのもありますが、限られた時間の中でプログラムを進行しなければならず、参加した若者が最後までできずに持ち帰って制作してきました。そのような想定外の事態は毎回あり、毎回美術館の職員さんが、若者たちのニーズや課題を考えて準備してくださり、実際にやってみて反省会をしてという事を繰り返しやってきました。

今年は美術館が休館しているという事もあり、これまで実施してもらったプログラムの資料を元に自分たちでやってみる事も始めました。

参加者がアートに興味がなくとも楽しめるように、表現する事で良し悪しの判断がされない、鑑



2014年10月「ヨコハマトリエンナーレ2014の鑑賞 & トリエンナーレポスターから消しゴム版画の制作」(会場：横浜美術館)

賞と制作を行うなど、美術館プログラムならではのエッセンスを残しつつ、施設のスタッフでもできるような事を行っています。

プログラム参加者との対談

ここからはプログラムに参加した2人の方に来ていただいています。隣に座っている斎藤さんには、最近実施したばかりの土から絵具を作るプログラムに参加してもらいました。自己紹介と、プログラムに参加したきっかけ、感想をお話していただけますか？

斎藤 こんにちは。ユースワークサポートふじさわから参りました、斎藤と申します。

美術館プログラムに参加したきっかけは、私自身が美術の展示を見ることが好きだったので、その美術館プログラムっていう名前に惹かれたって部分もあるんですけど、そもそもやっぱり絵具ってどういうふうにできてるのかっていうの知らなかったんで、そういったものをいろいろ教えてもらうという考えのもと、プログラムに参加させていただきました。

岩本 参加してみての感想を教えてください。

斎藤 そうですね、私としてはすごい貴重な経験できたと思います。

岩本 絵具についてのレクチャーはとても専門的だったと思うんですが、それは聞いてどうでした？

斎藤 世界史の方でアルタミラでしたり、ラスコーのお話っていうのは聞いたことがあったのですが、やっぱり実際に講義で教えてもらう中で、たくさん事を学ばさせていただきました。

岩本 普段のユースワークのプログラムと、美術館のプログラムでは違うとことか、何かありますか。

斎藤 そうですね。すごく印象的だったのは、やっぱり実際に自分自身の手を動かして、かつ、美術的な絵具を作るっていう体験をできたっていうのは、やっぱり他の講座とはまた違った体験がで

きたかなと思ってますね。

岩本 次の週のマスクングテープのワークショップも参加してくれたんですけど、斎藤さんは作品を作りながら違うものが出来ていったみたいな感じでしたよね。斎藤さんのいつもの感じとは違う一面が見られたと話していたんですよ。

斎藤 そうですね。マスクングテープのワークショップにも参加させていただいたんですけど、私も最初は全く違うものを作っていました。作っていく最中で、アイデアが洗練されていって、作品が自然と出来上がっていったので、私としてもすごい驚きがありました。

岩本 わりと普段はちゃんと用意周到にするタイプなんですか？

斎藤 そうですね、私自身の性格上、計画的で慎重派なんですけど、それを上回る程の作品への好奇心で夢中になって手を動かしていく中で作品が完成していきました。

岩本 ありがとうございます。ではユースワークの方にもマイクを繋ぎたいと思います。前回のワークショップに参加した大島さんにもちょっと話聞いていいですか。

大島 よろしくお願ひします。

岩本 大島さんにも、この前の絵具のワークショップに参加したきっかけとか、参加してみてどうだったか、聞いていいですか。

大島 きっかけとしましては、昔から絵を描くのが好きでして、最近も絵を描く機会があったんですね。それで絵具という言葉に惹かれたのと、あとは小さい頃からどろ遊びが好きで、よく公園とかで、土遊びをしていてどろ団子をよく作って光沢ができるまで作ってたんですね。そういうことがありまして、土から絵具を作るっていうのにごく惹かれて今回参加させていただきました。

岩本 実際やってみてどうでしたか。

大島 最初思ったのは、思ったより土から絵具になるまでの、工程がとても多いのだなというふうに感じました。学校の授業で美術の授業だとアクリル絵具とか、水彩絵具しか使ったことがなかっ



2022年3月「土の絵具で描かれた絵の話、土から絵具をつくる+ためし描き」(会場：ユースワークふじさわ)

たので他の絵具に触れる機会がなかなかない中で、美術の授業だと作品を作る、一つの材料が絵具みたいな。それをなんかこう、最初から作るというのはとても面白い体験でしたし、一つの作品を作るにしても、何か思い入れが深くなるなっていうふうに思いました。

岩本 ありがとうございます。隣にもう一人今日参加してくれている人がいます。ちょっと聞いてもいいですか。

新里 私がユースワークに通うちょっと前ぐらいに美術館さんと協力して土から絵具を作ったんだよっていうのを聞いて、正直もう少し早く来たら良かったかなって。ちょうど本当に1ヶ月ぐらい前、通う前のそれくらいからだったので。あんまり美術館とかにも行ったことがなくて、行ってみたいなって気持ちはあるんですけど、ちょっとハードルが高いので、もしまた機会があったらぜひ参加してみたいです。良いきっかけになると思います。

岩本 ありがとうございます。美術館も今休館中なんで、今はできないのですが、また機会があると思うので、ぜひ参加してください。ありがとうございました。

参加する方は美術が好きとか、何か内容に興味があるってことで参加してくれる方もいますし、逆に興味がないけれども参加してみて、すごい

ろんな気づきがあるっていう方もいます。どちらかかという、興味がなかったが参加してみても面白かったという方が多いですし、その気づきが面白いなと思っています。ありがとうございました。

報告 3

リスクを抱えた若者が息づくコミュニティとアート：
農場・ベーカリーの活動から

登壇

佐藤 洋作

NPO法人文化学習協同ネットワーク 代表理事

岩本さんとは若者政策研究者の宮本みち子さんが代表する「若者期の生活保障に関する国際比較研究会」で10年ぐらいご一緒させていただいて、国内外のいろんな実践も見回り、いろいろと若者を巡って意見を交換してきた関係ですので、だいたい若者に関する取り組みについて受け止めて喋るだろうということと呼ばれていると思います。

評価的まなざしに縛られ、動けない若者

先ほどから「生きづらさを抱えた若者」を対象にしたワークショップだと語られていますが、少し若者の生きづらさということについて説明します。この15年、20年近く若者相談窓口を開いてきましたが、どういう若者がやってくるかというと、ひきこもっていてまだ働いたことのない若者もいますが、既に働いている人で、つまずき、疲弊し、そしてメンタルヘルスの問題を抱えて現場からリタイアした若者も多いと思います。その背景には、ご存知のように働く現場が必ずしも若者たちの「働く」を支える関係ではないという部分もあるでしょうし、それから何よりもやはり人間関係もあると思います。

彼らはもう一度社会に再挑戦していくことにな

るわけですがけれども、長い間ひきこもっていたりすると、履歴書は書けないし、そのなにもしていない隙間について質問されたらどうしようということに拘泥していたりですね、いわゆる普通の生活には自分はもう戻れないんじゃないかと思っているんですね。社会的に作られた普通という基準を頭に描きながら、自分がそれから外れてしまったということに対する後悔というか、取り返しがつかないことをしてしまったなという挫折感を抱えていると思います。やはりここでも人間関係に自信がないということを語る若者が多いと思いますが、だから自分なんか社会に入っていけるのかという悩みの中で、K2インターナショナルさんにも我々のところにも多くの若者がやってくると思います。

では、ハローワークに行けばいいじゃないかということになりますが、ハローワークでは「あなたは何がやりたいんですか」って聞かれるわけですよ。求職票を探してきてくださいと言われるわけですね。ところが何をどうしていいかわからないという、それ以前の混沌とした状況の中にいる若者にとってはハローワークというのはやはりハードルが高いわけですね。それに代わるということになると、学校も卒業してしまっていますから学校に進路相談に行くわけにもいかな

い、どこに行ってもいいかわからないという感じで、長い間引きこもっていた方も多いと思います。さらに話を聞いていくと、コミュニケーションが築けず孤立しているという感覚が強いんですよね。彼らは他人が怖いと言います。思春期、青年期の学校や仲間との体験がというものが欠落していて、その期間にぽっかりと穴が開いてしまってるという感じですね。青年期のリアリティを体験してきていないという感じだと思います。それからやはり、評価的な眼差しに縛られているということです。やはり人の目が怖い、自分は使える、使えないと値踏みされているんじゃないか、人にどう思われてるか不安で動けなくなっている。これは若者の生きづらさを生み出している意識の状態、心理の状態だと思います。生きづらい若者というのはおおよそそんな若者を指しています。

次に、そのことと繋がりますが自信が持てないという状態があります。俺みたいな駄目な人間が、というふうな感じですよ。ぼくの団体が運営しているパン屋で仕事体験している若者の話ですが、接客の場面で、「自分のようなものが声かけても皆さん喜んでくれないんじゃないか」と語る若者の自己否定的な感情には驚かされます。それから何よりも、わからないことがあっても「そんなこともわからないのか」と思われなかと、質問もできないという若者の悩みは共通しています。できるかできないかということがかなり重要です。それ以上にその結果に対して周りからどう思われるかというふうな評価の目でものに対して非常に不安を感じているのではないのでしょうか。そのように自分に自信もない若者に何がやりたいのか聞いてみてもなかなか答えられません。やはり将来に対する希望とか方向感ってというのがなかなか持てないわけで、とにかく自分の今を持って余しているという状態でしょう。

さらには自分は自分の意思で生きてきたのかというふうな自分に対する絶望感みたいなものを心の中に持っているのではないかと思います。これでは動けないですよ。このような生きづらさを

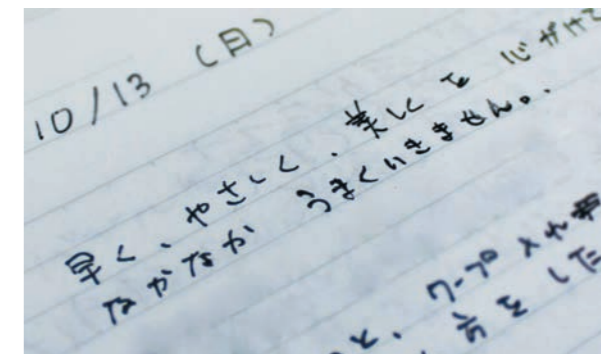


抱え、動けない若者に対する美術館とK2さんとのコラボのワークショップだったと思います。

競争的・評価的ではない働き方の追求

さて、そんな若者と一緒に、私の団体では農業体験やパン屋体験などを進めています。最初の端山さんのお話にもありましたが、なぜ農業やっているのか、なぜパン屋をやっているのかということですね。この取り組みはアートワークショップのねらいとかなり重なるところがあるのではないかというふうに思いますが、そういう意味合いで今日のコメント役が要請されたものと思います。

僕たちの取り組みは学習塾から始まっています。もう少しで50年になりますが三鷹の周辺で取り組みを続けてきました。最初にパン屋の話です。2004年にパン屋が生まれました。不登校やひきこもりの人たちの親の人たちと協力しながら始めたパン屋です。下の写真の工房日誌にあるように「早く優しく美しく」「なかなかうまくいきません」というような振り返りを書きながら、喜



んでもらえるパンへの挑戦を続けていきます。このスライドは、パン生地を分割して成型しているところですね。こんな感じでパン屋も続けてきましたけれども、そうですね、パン屋の1日ということになりますと、「作業する」、「つくる」、そして「振り返る」ということになります。体を使ってパン生地をこねて成形して焼く。生地を作るのは天候具合も関係して難しいですから、慣れたスタッフがやりますけれども、こねたり、成型したりするのは、多くの若者が徐々に参加するようになってきます。一日の作業が終わったら、作業内容やパン作りについて、グループで振り返り語り合うわけです。これは美術ワークショップと一緒になんですよ。グループで言葉にしていく。ああだった、こうだったというのを言葉にしていく。そしてみんなでよかったね、ああだったね、というそれぞれの一日の感想を出し合っていきます。そして自分の考えもそこで言葉にしながら集団化していく。この体験を集団の体験にしていく。そんなサイクルで毎日毎日繰り返しています。そこで、おそらく一番重要なのは、「試行錯誤」という言葉が先ほどのアートワークショップの報告でも出ていたと思いますが、やはり結果でなくて、そのプロセスの試行錯誤を非常に大事にするという取り組みになっているかと思います。上手な人は難しい部分を、初心者は非常に周辺のけれども、機材清掃や接客など役割を持ちながら、全体で一つの仕事を進めていくという体験の場になり



ます。

ですから、先ほどの報告でも触れられていましたが、やはり「こうしなさい」「あしなさい」という指示・指導じゃなくて、自分の感覚を大事にして作りながら、徐々に見よう見真似で上手になっていくということです。

それから、やはりお客さんが「おいしいね」と喜んでくれるパンを作ることがみんなの最大の願いであり、喜びであるということですよ。そしてその仕事は、有用な文化、食文化をつくり出す営みであり、皆さんが喜んでくれるおいしいパン、安心安全なパンを作ることが、みんなのモチベーションになっていくということです。要するに競争的・評価的な労働観、働き方ではない働き方を体験するということです。この作ったパンがどれほどの利潤を生み出すのかという価値観ではなくて顔の見える街の人たちが買いに来ること。安心安全だから子ども連れも喜んでくれる。そういったような街のパン屋さんでありたいという願いに支えられたパン屋であることが働く体験の中では非常に重要だろうというふうに思っています。

身体の活性化と協同体験

次は農業体験のスライドです。これは田んぼを作っているところですね (27ページ左上)。こういう感じで田起こしの段階から自分たちでやるわけ



ですよ。これは、田んぼの中に飛び込んでいますよ (同右上)。働いているのか遊んでいるのかわかりません。田んぼの中でドロドロになって遊んでますね。泳いでいる人もいます。ちょうど春から1年間の取り組みが始まります。とにかく体を解放していくというか、体と自然を繋げていくという取り組みになるかと思いますが、この後、体がドロドロになるからその村に流れている水路の中に飛び込んで、まず体を綺麗にして、今度は冷めた体を近くにある温泉に浸かって温めます。そうすると体そのものが喜びを感じてしまうというか、ですから田んぼづくりは非常に汚くて困難があるけれども、その後の快感みたいなものが、またやりたいなと感じさせてくれます。やはり人間の意欲の根元にはそうしたものがあんじゃないのかなって思います。こうありたいという根っここのところに、やはり体が求める快感やそのときの気持ちよさや、そしてみんなとやったことの喜びや、そういったものが人間の意欲っていうか前へ進んでいく根底に備わっていないとエネルギーが出ないのではないかなというふうに思いますね。

今度は畑の映像ですが、神奈川県相模原市の津久井というところに、東京農工大学の農場がありまして、そこに参加させてもらって、今では村の畑を借りて農業体験を行っています。最初の頃は不登校の子どもたちのプログラムでしたが、だんだん若者の本格的な農業体験になっていきまし

た。当時ブルーベリーを植えて、今はもう村中にたくさん実をならせていますね。若者が言った「体を動かした分だけ気持ちも動き出すんだ」という言葉ですが、ほんとうにそうだろうなと思います。人の感情や欲求というのは、心と体が一体のものとして統合体として身体が感じることであって、心だけで感じるわけじゃないし、体だけでもないということです。両方で感じるんじゃないですかね。そういうふうなことを言った若者の言葉に、なるほどねというふうに思いました。農業体験でなくてもいいと思うんですが、あまりにもそうした遊びが、本来あるはずの日常の営みが、子どもや若者の中になくなってしまっていると言えるのではないのでしょうか。

次のパンのスライドですが、これは完全に自分のところで作った小麦と、それから村で採れたブルーベリーで作ったジャム等を使ったパンです。こうしてみると僕たちのパン屋体験も農業体験も、端山さんの報告にあったアート実践に近いのかなという感じがしながら聞いていました。ということで、農業体験は身体の活性化ということがものすごく重要だし、物を作るっていうことと、それをみんなで共有するっていうことにおいてアート実践も同じなのではないかというふうに思います。

不登校や引きこもりになって思春期、青年期を経過せざるを得なかった若者たちには、そういうみんなで克服して喜び合うような体験が本当に欠

けていると思います。学校生活等々で本来ならば、体験した方がいいだろうなというような、そういう経験が非常に少ないのかなというふうに思います。

農業やパン作りの体験を通して、モノを作り出すこともできる身体性、能動性、身体的交流能力のようなものが目覚めていけばいいなというふうに思います。さらには、ものを作るという協同体験によって、その達成感や、自分の社会的有用性、社会的共同能力のようなものも感じ取ってもらえればいいなというふうに思います。それから農業もパン作りもそうですが、そこにはいろんな多様な仕事がありますから、僕はこういうことができるんだ、私はこういうこと好きなんだ、という自分の中の特性、個性への気づきが生まれてくるのではないのでしょうか。

こうした経験や気づきが生まれるためには、端山さんの話にもありますが、職員が先生にならない、作品の良し悪しを評価しないということが決定的に重要だと思います。評価的に眼差されていない、安心安全を保証された場での悪戦苦闘や、そして表出の喜びを、みんなでも共有していくという体験は自然にはできませんから、それをワークショップという形で、人為的に作り出していくという営みというのは非常に重要なのかなと思います。それから、うちに来ている若者たちがデッサン教室を自分たちでやりたいって言って開いたらいいんですが、これに参加者が多いんだそうです。何かの営みを通して自分に集中するというか、そのことの心地よさみたいなことを要求しているのかなというふうに思います。そのときに、上手下手が気になるようでは心地よさは感じられません。そういう意味ではこの美術館のワークショップは、抽象絵画というか、抽象的なアートをベースにしてやられていたのは非常に良いのかなというふうに思います。それが何らかの意味とか目的ではなくて、ただそこに表現があるというものに出会っていくというのは、非常に今の若者たちには苦手というか、経験してこなかった時間

ではないかなというふうに思います。

なくてはならない体験や学び・学び直し

最後に若者の現状や若者政策について触れます。不登校の子どもたちと何十年もつきあってくる中で、1980年代から90年代にかけてですね、子どもたちの生活空間はどんどん競争的な価値に浸食されて、ゆったりできる居場所を奪われていくという中で子どもたちは悲鳴を上げ始めました。そのことによって引き起こされたのが子どもたちのいじめであり不登校だと思うのです。さらに、90年代中ごろのバブル崩壊以後、「ロスジェネレーション」と言われるような若者が増えていく中で、その時点で生まれた労働政策は、端的に言えば、不安定な就労が増えていったというわけです。派遣業もどんどん規制緩和されていきますし、大学は出たけれど非常に不安定な就労しかなく、働かないわけにはいかないから働いてみたけれどもやはり続かない若者が増えていった。あるいは不登校体験を通して、自分が前へ進んでいくというエネルギーをもう既に喪失しているのにも関わらず、社会の入り口でより高いハードルが生まれてしまった。8050問題が叫ばれていますけれども、それ以後5年10年とひきこもって出て行くチャンスを失ってしまうという事態がどんどん一般化していく中で、「ニート」という言葉が、2004年に本が出たりして、一気に社会的用語になっていきました。「ニート」というと、非常に否定的な、“働かない”若者たちというマイナスイメージがそこには付けられていると思うのですが、実は若者は、“働かない”というよりも、“働けない”のです。

「働けない」には二つ意味があって、自分を肯定して、少々の困難でもそこに自分を投げ出しながら、みんなと一緒に価値ある世界を作っていくという、そういう主体的な意欲の欠如と、もう一つはやはり人間らしく働く場がないということだと思います。

まともに自己実現できる働く場がない。ですから働けるのになぜ働かないと言われると、それは違います。働きたいけど働けないのであって、そこには大きな違いがあるのではないのでしょうか。ともかく、国も諸外国に10年から15年遅れながら若者政策を起動させて、徐々に2000年代の5、6年ぐらいからいろいろ次々と政策が出されていきます。しかしながら、岩本さんのところも開かれている若者のための相談機関であるサポートステーション、全国177ヶ所ということですが、十分に若者たちのニーズに応えられているというふうには思いません。先ほどから報告してきた農業やものづくり体験など、働くことの根っこになくてはならないような体験や学びが必ずしも十分に位置づけられてはいないということがあります。そこには予算もついていませんし、ともかく相談して、どこかに繋げるという「キャリア支援」というのがベースになっています。課題としては、学校から社会の移行期を、単に仕事を紹介するにとどまるのではなくて、もう1回移行期を学び直す支援が大切になります。移行期をもう1回若者がやり直すことができるような社会システム、あるいは社会保障的なバックアップが必要だと思います。岩本さんたちとヨーロッパを見て回った中で見てきたのは、やはり学校から社会のトランジション（移行）を支えるというのが若者政策の基本として位置づけられています。このところが日本は欠如しているのではないかとこのと、もう一つは、やり直すこともできる、何度も何度もやり直しできるような社会保障というのが必要だと思いますが、それに対してはまだまだ貧弱だろうというふうに思います。時間が来ましたので、これで一応終わりにします。

報告 4

美術館と福祉、教育のあいだ： 若者支援プログラムの論点

登壇

梨本 加菜

鎌倉女子大学 児童学部教授

「若者支援プログラム」をとらえる視点

第三部のはじめに、第一部、第二部でお話をいただいたものをふまえて論点をまとめたいと思いました。タイトルにある「美術館と福祉、教育のあいだ」ということで三つ、それから少し付属的なもので四つですね、論点をまとめて話をしたいと思います。

それでは「とらえる視点」を見ていきます。第一部、第二部でお話をいただいて、様々な視点があったかと思えます。若者支援ということだけでも、それから美術館の教育普及活動という意味でも、このようにたくさんの視点が入っています（図1）。

図1：若者支援プログラムをとらえる複数の視点

博物館教育、美術館の教育事業
社会教育、地域教育、成人教育
福祉サービス、地域福祉、就労支援
社会的包摂、社会的正義
若者の自己形成・変容
サードプレイス論 etc.



美術館とは？
教育普及事業とは？

それを突き詰めると、そもそも美術館とか、この教育普及事業とは何かとか、そういったところの考察に進んでいくのではないかと思います。

制作の復権と生・大地への回帰

一つ目の論点としては、このプログラムですね、全体的に見て「制作の復権」ということが言えないかと、私の感想も含めて提案させていただきたいと思えます。それから佐藤さんの報告に農業体験ということがありました、とにかく生きることですね。生に加えて大地、そういったものへの回帰ということも言えるのではないかと、これが一つ目になります。画像がこれ、横浜美術館は今、休館中ですが、ここの会場で水簸（注：水中での沈降速度の差を利用して粒子の粗細を分別すること）の作業などがされているところです。制作への復権ということで一つ、まとめたいと思えます。

その若者支援プログラムですね、若者対象ということで、歴史をさかのぼると何ががあるかなと考えると（図2）、まずサウスケンジントン博物館ですね。これは今のロンドンの科学博物館とヴィクトリア&アルバート美術館の前身となります。

図2：美術館の教育事業の歴史から見る若者支援プログラム

19c. 後半	(英) サウスケンジントン博物館の労働者講座	
20c. 前半	(米など) 解説、導入展示、イベント	
1970年代-	(日) 列品解説、実技・造形の講座	都市の大型館
1980年代-	ワークショップ、ボランティア	地域の公立館
1990年代-	参加、対話による鑑賞、社会的包摂	
21c.	鑑賞プログラムの普及、制作との乖離？	観光・サービス？

そこで労働者対象の講座で、当時は男性中心になりますけれども教養講座をしていますし、それから女性向けに陶芸講座ですね。ちょっと就労支援のようなことで陶芸のレクチャーをしていたことがあり、そういった歴史をさかのぼると、労働者階級に向けた、一般大衆に向けた教育事業というのはヨーロッパでもやっと19世紀の終わりぐらい、20世紀の始まる頃から出てきています。

その後はアメリカです。アメリカで美術館、博物館が非常に力を持ってきたときに、ボランティアの方も含めた解説であったり、一般向けの導入的な展示であったり、それからイベントですね。



横浜美術館仮事務所（PLOT48）での準備風景。

展示会をやったり、音楽会をやったりとか、いろんな大衆向けのイベントが増えてきています。

その後は日本の、という話に進んでいきます。1970年代に、博物館の設置ブームもあって大型の博物館がたくさんできてきた頃ですね。しっかり解説をしたり、実技や造形の講座を行ったりする、いくつか代表的な事例も出てきています。

1980年代になってくると、都道府県を越えて、さらに市区町村であったり、そういった公立博物館が増えてきて、「地域の博物館」としてワークショップと言われるような講座であったり、ボランティアの参加ですね、解説など、ボランティアの方が活躍したりといった流れがありました。

1990年代から、かなり美術館で教育プログラムと呼ばれるものが広がって、対話による鑑賞であったり、それから社会的な、ということでスライドにありますけども、社会的包摂やインクルージョンであったり、そのような理念も言われるようになってきます。

今となりますが、全国の美術館でいろんなプログラムに取り組まれています。ただ全体的に見ると鑑賞プログラムのものが中心で、がつつり作っていくと言うと変ですけども、そうした制作との乖離もあるかな、という特徴を挙げたいと思います。あと社会的な背景としてサービスの、市場化みたいなものが進んだという視点もありますね。

このプログラムについては制作の復権と「生」と「大地」への回帰という特徴を挙げますが、こ

これは端山さんの指摘にあったところで「つくる」ことへの着目ですね。既に発表でいくつか出てきたところですが、鑑賞という場合も、とにかく言語化を促すという特徴があります。制作については、とにかく黙々と見ていく、黙々と作っていくというふうな特徴があって、私も初めてこのプログラムを、アウトリーチのところを拝見したときに、とにかくみんなが静かに黙々と作っている姿に本当に衝撃を受けました。そういう意味で、一般的な若者向けのプログラムとはちょっと違う特徴を持っているのではないかと考えています。

若者と、若者支援コミュニティとの邂逅

それで二つ目ですね、若者と、それから若者支援コミュニティとの邂逅ということです。K2インターナショナルグループが持たれているファームから土を取って2022年3月のワークショップはスタートしているのですけれど、まず若者との出会いといいますか、エンカウンター（遭遇）ですね。若者ってあまり美術館に来ないという状況があって、また一般的な大学生ではなく、さらに今回のように生きづらさを抱える若者がなかなか美術館に来ないという、ここは注目していかないといけないところかと思っています。

若者について一般的なことですが、小・中学校でちょっと図工とか美術の授業が苦手で、アートもよくわからないという意識を持ったままで高校に普通に進学してしまい、それから大学にも、高

等教育的なところにも進学する中で、なかなかアートのなもの、それから美術館に触れる機会がないという現状があるかと思っています。その意味でも、積極的なアウトリーチは必要かと思っています。海外でも若者向けのいろいろな事業も行われています。

それから今回ですね、このK2インターナショナルグループと協働で行うというのは非常に大切なポイントかと思っています。簡単な図を書いてみました（図3）。例えば、よく障害のある方向けの、サービスの事業がありますが、今回は視覚障害のある人が終わって、次はどういった何か障害のある人、病弱の人で、じゃあ次は若者に…といった対象を網羅するものではなくて、ということですね。

まずは、K2インターナショナルという、そのコミュニティ全体の生活、文化的なものを持っているコミュニティと美術館との出会いという特徴を挙げたいと思います。コミュニティと美術館との出会いによって、そもそも美術とはとか、美術館とは何かとか、そうした権威性を持っているものについて認識を問い直す機会になるのではないかと考えています。

美術館と福祉、社会教育とのあいだ

それから三つ目の観点ですね。美術館と福祉、社会教育とのあいだということです。

美術館と福祉のあいだということでは、そもそ

も社会福祉ですね。しだいに地域福祉が言われてきて、1980年代ぐらいから一般的、普遍的なサービスに変わってきていることで、従来型の社会教育と結びついてくるのは、ある意味、運命的なところがあります。そうすると美術館は存在する限り、地域住民への奉仕というのは使命、というふうに考えていくのが、もう当たり前になってきています。さらに障害者差別解消法などもあって、いろんな利用者のアクセスの保障は最低条件としてあるのだろうということは、一つ言えるかと思っています。

ただし横浜の特徴で言うと、こちらに地域ユースプラザという仕組みがあり、バリバリの就労支援というわけではなくて、そこに特化しない地域ユースプラザという仕組みがあって、そこで就労支援に特化しない美術とか美術館体験が可能になってきている、そのような背景もあるかと思っています。

一つ、美術館と福祉のあいだということで特徴をあげましたが、それから社会教育ですね。社会的階層というのはよくいろんな調査でも言われているところですが、経済的に余裕がある、時間的余裕がある、そういった階層はリピートをどんどんしていくのだけでも、美術館に来ない層は来ない、それから、そもそも関心がないというような、そういった格差が広がってくる現状があります。ここは社会教育施設の限界として一つあるかなと思います。そういった機会の保障ですね、ここはとても大切なことです。

それからやはり若者に届きづらいといいますが、グレーゾーンの若者っていいですか、ピンポイントでこのターゲットというように狙いづらい若者については、なかなか対象になりづらいところがあります。

あと、横浜市の特徴もありますね。横浜市の場合は、戦後すぐはアメリカに接収された土地が非常に多かった、そんな事情もあって、一般的な社会教育施策や施設といったものが、公民館的なのものが普及していないということもあって、独自の

歩みをしてきています。そういうものを複合的に考えてということをしていかないといけないのですが、社会教育と美術館のあいだということも一つ挙げておきたいと思います。

プログラムの評価の難しさ

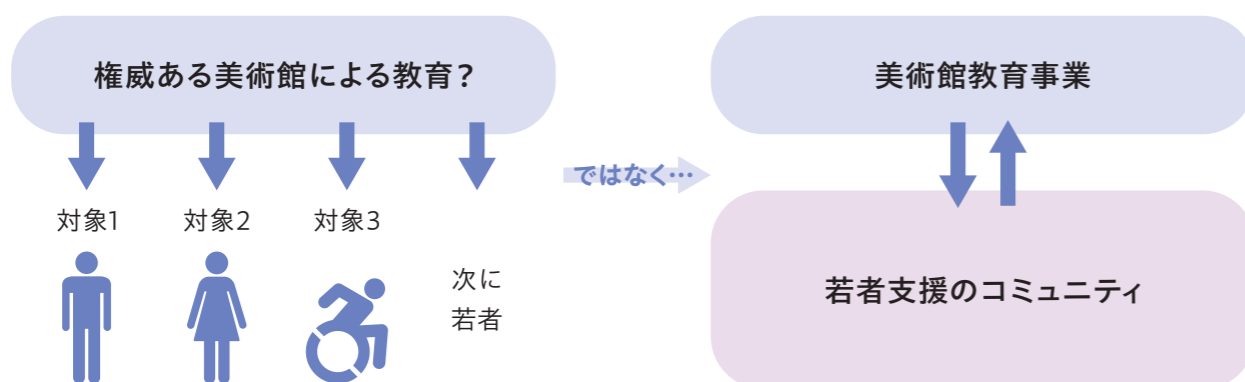
最後に、事業評価の難しさ、それから継続の難しさも挙げておきます。事業評価については端山さんから、そもそもこのプロジェクトをふり返りたいという話もありましたが、やはりなかなか調査が難しいところがあります。参加者の追跡は、K2インターナショナルグループと一緒にやってきたからこそできたという、そういう調査になりました。ただ、こういったプログラムや調査に参加したからということで、若者にとってスティグマ的なものは絶対あってはならないので、そのような研究倫理との狭間という課題もあります。

それからやはり、これはどんな美術館の普及活動でもそうなのですが、可視的な教育的価値であったり、効果を示したりすることが非常に難しいということがあります。例えば若者が美術関係職に就いたとか、美大に進学したとか、そういうことで評価していいのか。あと意欲といった形式陶治的なことですね、そういうこともなかなか測るのは難しいです。なので、調査の分析方法として、私どもは言語分析が現実的なのではないかと考えているのですが、そのあたりは、それこそアイデアなどをいただきたいところです。

継続についても同じです。やはり事業評価、確実な評価というものが難しいところもあって、継続は難しい。コロナウイルスなんかもありますので、そのような難しさがあるということです。

まとめると、こういった四つの観点と、あとその他としても図書館などでグレーゾーンの若者に向けたいろんなプログラムが取り組まれています。そのような、他の施設にも目を向けてみるのもありかなと思います。ディスカッションに先駆けて、私からは以上です。

図3：「若者支援コミュニティとの邂逅」のイメージ



ディスカッション

若者支援プログラムを評価・再検討する

登壇

端山 聡子

横浜美術館 教育普及グループ
教育プロジェクトチームリーダー

岩本 真実

K2インターナショナルグループ

佐藤 洋作

文化学習協同ネットワーク
代表理事

梨本 加菜

鎌倉女子大学 児童学部教授

司会

古藤 陽

横浜美術館 教育普及グループ 教育プロジェクト 鑑賞教育エディター

古藤 それではここから30分程度と短い時間ではありますが、前半でお話いただいた佐藤さん、岩本さん、先ほどお話いただいた梨本さん、そして横浜美術館の端山の4名でのディスカッションに移らせていただきます。

福祉と教育の融合する地点

まずは梨本さんにお示しいただきたいいくつかの論点から議論を始めていきたいのですが、この導入部分のタイトルとして「美術館と福祉、教育のあいだ」というように、福祉と教育という大きな領域とこのプログラムとの関わりについて触れていただきました。このこと背景として、おそらく若者支援という取り組みそのものが福祉と教育の両面を持つことがプログラムの性質にも関わっているのではないか、と思い、まずは若者支援と福祉、教育との関係について、佐藤さんから口火を切っていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

佐藤 若者支援の現場で、一番大きなテーマは、やはり憲法13条にありますように幸福を追求する権利、自由及び幸福追求に対する権利が保障さ

れなければならないということです。競争的な教育や労働現場で権利行使できなかった若者たちがその権利を回復していくっていうか、掴み直していくという支援です。それは福祉をつくりだしていくということになりますが、27条の勤労の権利は26条の学習権と並んで謳われています。さらにその前にある25条では生存権保障という、学び働く権利の前提になるものが謳われています。社会福祉、社会保障を受ける権利です。つまり福祉と教育・労働はひとつながりのものとしてセットになっています。ですから子どもや若者は福祉的環境の中で幸福権を追求する主体として育っていくことができるのです。そう考えると教育とその営みを支える福祉は一体のものとしてあると思うんですね。そういう意味で、福祉か教育かというふうに分けられるものではなく、それは統一的に追及されなくてはならず、それが若者支援現場の様々な取り組みだと思います。

私たちの団体の取り組みは子どもの学習支援から始まったということになりますが、子どもたちがどここの進学コースに進むことを目的にした矮小化された教育活動ではなく、「学ぶということ」の喜びを追及してきました。学ぶこととは、

対象世界、自分にかかわる人や事やものと対話をしながら、色々感じ考え、そしてそれを言語化し、コミュニケーションを通してやりとりしながらですね、そこに新たな自分の関わり合いの世界、人間らしい世界をどんどん広げていくことです。そして自分がその世界の主体として、自分の居場所を獲得できるようになるっていうことが、学ぶということの基本だと思います。労働に関しましても利潤追求に一元化された労働ではなくて、自然、先ほど「大地」っていうキーワードも出てましたが、その自然と対話しながら、そこから価値あるものをつくりだす作業であり、ですからその過程は学ぶ過程そのものだと思います。ですから長らく40年、50年とやっていて、子どもの学習支援から始まり、今は若者支援をやっていますが、違ったことをやっているように全然感じないですね。

美術館がなにか高尚な一部の人の所有物ではなくて、多くの人々が学び働いて自分の世界をつくっていくときに、その学びと労働を支える文化的で健康的な生活を増進する生涯学習の場であると捉えなおすならば、地域の公共施設としてですね、美術館は憲法25条で保障されている権利保障の場、福祉的な施設ということになります。若者に関しても、まさに学びの場として、あるいは学び直す場としての地域の共有財産としての美術館であって欲しいと思います。生涯学習という取り組みそのものが、なにか高尚な人たち、一部の文化的な人たちが行うことっていう感じで、社会教育が生涯学習と呼ばれるようになってから、なにか限られた一部の人の専有物になってしまっただけで、地域の生活社会から切り離されてしまったのではないかなという感じはしています。さらには、公共施設だからこういうふうに使わなくちゃいけないといった規制が入ったりします。そこにはいろんな人々のいろいろな思いや考え、活動が保障されなくてはならないのに、それが政治的な立場によってそれが選別されたり規制されたりすることも起こっています。それをどう乗り越えていっていかってということも課題ですが、そもそも地

域の美術館は少ないですね。もっと多くてもいいんではないですかね。もっと一般の市民が出入りできる、ただ鑑賞の場ではなくて様々な取り組みを、アートというのはもっと広い意味でしょうし、そういう活動の場として提供されるべきだなと思います。若者に開かれたこの実践というのは非常に面白かったし、それがもっと普遍的なものになっていけばいいなというふうに思いました。

福祉と教育ってというのは分けられるものではなくて、やはり憲法にある幸福追求権を保障するためにも、教育は必要ですし、そして教育的な取り組みを進めるために、その環境整備を含めた社会保障は絶対に必要ですから。分けて考えられないものじゃないかなと思っています。

美術館と若者との距離

古藤 佐藤さんありがとうございます。

今ちょうどキーワードとして佐藤さんに出していただいた「居場所」ということに関わると質問をチャットで一ついただいているので、読み上げさせていただきます。「現代社会の中で、多様な背景を持っている若者自身が美術館あるいは美術館での営みを、自分たちの町の場所の一つとして心の底から実感することのできる場となれるといいなと思って活動していらっしゃるということで、若者の居場所という観点から、この事業はどのように評価されるのでしょうか。」ということで、これはプログラムについての質問ということで、端山さんと岩本さんから一言ずつコメントをいただければと思います。居場所という観点でこのプログラムはどうか、ということで先ほどの佐藤さんの話にも繋がるかなと思いますが、いかがでしょう。

端山 若者のこのプログラムはあくまでもプログラムの一つとして行っているのだから、美術館にフラットときたりとか自由に来たりとか、そこで時間を好きなように過ごしたりという意味での居場所というものにはなっていないと思います。ただ、居



場所って生涯学習や社会教育的な場所の運営ってというのは、美術館・博物館では、ほとんどなされていないことが多い。つまり自由に活動できるスペースが、提供されていないことが多いのかなと思います。どうしたらいろんな方に対してハードルを低くして、立ち寄ってもらうことができるようにするのかという点から考えると、来た人を受け入れて、かつ居場所で話し合っ立ち上げる活動が生まれることも未来の美術館にはあり得るのかもしれませんが、今はそういうことはできていないという現状があると思います。

岩本 私はこのプログラムを通して、若者たちにとって美術館が地域の居場所の一つになるきっかけを作っているのではと思いました。具体的には、今回アンケートやヒアリングをして、参加した若者の中に、その後に自分で美術館に行きましたという人が何人か居て、それはすごい嬉しいことでした。若者たちにとって地域の行動範囲に今までインプットされてなかった、地点登録みたいになされてなかった美術館が、ここには行っていいんだ、あそこは行ったことがある、面白かったとかってということが記憶にインプットされて、ま

たお母さんや行ってみたいとか、自分1人で行ってみたいってようなことが起きてるってのは面白くなって思いました。

若者支援施設でおこなうプログラムでは、ワークショップで制作したものが若者の居場所内に飾られているんですが、やっぱりプロの手が入ったものはすごいんですね。居場所の壁に飾られている作品を通して美術館との接点ができて身近に感じられるのも素敵な事だなと思いました。

美術館のプログラムで感じるの、やっぱりあんまり若者におもねらないというか、美術館ってものを、参加した若者たちが、「すごいな！面白いな！」って言うふうになってもらうみたいところがすごく大事だと思っていて、もちろんその配慮をして貰ったり、お互いに歩み寄ったりってことあるんですけど、そういう中でやっぱりこれってすごいなって思わせるところがあるのが、このプログラムの魅力だなと思います。

古藤 岩本さん、ありがとうございます。今プログラム作りのことについて岩本さんから、「若者におもねらない」という話もあったんですけど、先ほどの梨本さんのお話の中でもあったよう

に、このプログラムの一つの特徴として「若者」一般に対してオープンに参加者を募集する形ではなくて、K2インターナショナルさんと連携をして、利用者の方々を主な対象としてやらせていただいているということがあります。つまり、他のプログラムと比べて「参加者」の姿が比較的意識しやすいプログラムではないかと思います。それを踏まえて、続けて岩本さんにお伺いしたいのですが、このプログラムの実施にあたりこういった形で参加者を集めているのでしょうか、またプログラムが終わった後にはこのことについて参加者の方々と話したりするのでしょうか？

岩本 そうですね。ユースワークふじさわの映像もあったんですけども、相談員の人たちから誘われてってというのがほとんど参加のルートだとは思っています。先ほどお話ししてくれた方のようにちょっと興味がある、内容に興味があるから参加してみようって方もいれば、本当に暇だからという感じで参加した、言われたから参加してみるか…みたいな感じで参加する方もいるかなと思います。きっかけはいろいろなんですけども、やっぱり実際参加してみて、驚きがあったりとか普段私達が提供している自立とか就労に向かう何か実用的なプログラムとはちょっと違うところと、やっぱり端山さんのように熱く、土から絵具について語るところみたいなのは、すごい面白さを感じてくれるんじゃないかなって言うふうに思っています。

「つくる」ことがもたらすもの

古藤 ありがとうございます。佐藤さんのお話の中でも「つくる」ということと身体に関わり、それから「働く」ということで身体が開かれ、活性化されていくというような過程と「つくる」ということとの共通点についてお話をいただきました。先ほども、学び直しや学ぶということが対象世界との対話であり、関わり方を変えていく作業だということをおっしゃっていたかと思うのですが、多

分その「関わり方を変える」ということの中で、身体が大きな役割を果たしているのかなと思いつつ聞いていました。それで、プログラムの内容に関わるのですが、話題に挙がっている「つくる」という行為について、美術館のプログラムの中では「制作」という言い方をされていて、あえて「表現」とか「創作」という言葉を使わないようにしていると思います。そのあたりの意図について端山さんに伺いたいのと、関連するチャットでのご質問も一つあるので、あわせてお答えください。「制作や“つくる”という過程で、何か一つの完成形を目指すという形をとらないでやっているということですが、参加者の中に制作の見通しが立たないということが苦手な方もいらっしゃるんじゃないか、その場合の導入や声掛けの工夫などもあれば教えてください」ということです。

端山 この若者支援のプログラムで行っている「つくる」という部分ですけども、先ほど佐藤さんもプログラムで取り上げているのが抽象的な作品であることを指摘してくださったのですが、職員みんなで相談していくと、こういう作品がいいんじゃないかと一致するのが具体的に何が描かれているというのではなく抽象的なものになっていくんです。振り返って考えますと、言語化がすぐにできない作品を選んでいてと思います。どうしてこんなものがあるんだろうって言うような、ちょっと不思議に思うような、好奇心をかき立てられるようなものを選んで、ワークショップに展開しているかなと思います。そこで行われている「つくる」というのは作家の技法をなぞるというよりは、何か一つの行為をしたら一描くとか折るとかですが、その行為が次の行為を誘発するようなものです。あらかじめこれが完成形というアイデアがなく、何か積み重ねていった先にできちゃったものがある、みたいな制作を「つくる」という部分でやっています。誰でも参加しやすい方法であるということ意識しています。理想に近づけない、自分にはそれはとてもできないだろうということをお考えさせないように。目標

やすぐれた完成品をあらかじめ設定できないようにすることで、間口が広がるのではないかと。鑑賞の部分で言語化をやっているの、逆に制作の部分では非言語、ノンバーバルなことに特化した活動をしていこうと考えています。作品や美術館の展示室は、ほとんどきっかけや参照する役目として使っています。逆にゴールを決めないことが苦手な方がいるんじゃないかっていうお話がありましたけれど、人物や風景を描きましょうというふうに、何が描いてあるかわかるものってというのは、学校の美術の授業とかでも経験があると思いますが、比較がしやすく言語に回収できることが多い。なので、言語化できることを逆に遠ざけているというところに特徴があるのと、自己表現にダイレクトに結びつかないようにしているという特徴があるかなと思います。自己表現するって美術や国語の授業などでも要求されることかもしれませんが、意外とストレスをとまなうことだと思います。なので、そういうストレスがかからない入り口をいかにつくるかということ意識しています。

若者と社会の関係を結びなおす

古藤 もう一件、チャットで質問がきていますので、読み上げさせていただきます。これは佐藤さんと岩本さんにお答えいただくのが良いかなと思います。

「社会福祉協議会で働きながら地域で生きづらさを感じる子どもたちの寄り添いのボランティア活動をしています。地域福祉の観点で教えていただきたいのですが、若者支援をしていくうえで協働してよかったセクターなどがあれば教えてください」ということで、コメントをいただければと思います。

佐藤 他機関の連携は絶対必要だとは思いますが、難しいな。そうですね、若者の生きてきた世界というのは非常に狭いですから、できるだけ多くの方が、多様な方が関わり合いを持った方

がそれだけ若者の出会う人も多くなり世界が広がっていきます。そして、長い間引きこもっていたら、見て、聞いて、感じた世界がものすごく縮減されてますので、そこの中でつくられた考え方が自分の中に内面化されて、そういう狭い偏った考え方で自分自身を苦しめてるっていうのがありますよね。そうすると多様な人たちが、多様な関わり合いを持つという、あるいは出会う世界を広げていくという意味においては、専門機関ではない一般の方々も含めて広がる必要があります。意外と若者を見ていると、今まで長い経験の中で、我々のような支援機関の人間よりも街のおっちゃんだったりおばちゃんだったりの方が、若者の心に響くっていうことは、いっぱい経験してきています。普通の街の人々との出会いや世界が狭すぎるのだと思います。

さらに言ってしまうと、若者の考え方を批判、否定するような言葉はダメなんですね。極端なことを言えば、アドバイスというのも駄目なんですよ。アドバイスされると自分が否定されてるような感じになっちゃいますよね。「こうしてみたら」って言われると、「そうじゃなくて」が前提になっちゃうわけですから。それこそいろんなハチャメチャな人も含めてですね、出会っていく必要があります。場合によっては多様な専門機関がネットワークをしてそれぞれの機関に集まった若者が相互に出会い、交流していく。それから、やっぱり気楽な経営者との出会いが大切ですね。大丈夫だよ、失敗しても大丈夫、なかなかやるじゃんと声をかけるようなフランクな経営者が若者の生き方に大きく影響を与えるのではとったりします。要するに支援者という専門機関というよりも、もっと一般の人にいっぱい出会って、場合によっては青年期の次に見える働く世界を気楽に紹介してくれるような人が重要ではないかなというふうに思うんですけど。

岩本 そうですね。私たちは支援する側とされる側みたいな関係は違うと思っているので、若者たちとの対等な関係を作る媒介みたいになれるもの

があるといいなと思っています。このプログラムを作る上では美術館の方々ともよくそういう話をしてきました。K2の事業として養蜂をしてるんですけども、ミツバチのお世話をしている若者が、大企業の屋上で養蜂をしている方とすごく対等にミツバチの話語り合ったり、養蜂の技術を教えたりという場面を見たことがあります。年齢や性別や社会的な立場を抜きに、対等に若者たちが付き合える大人や出会える場が作れるといいなと思います。農業もそういう場になると思いますよね。若者支援したいです、人助けしたいですみたいな人たちが集まってくると、引いちゃうと思うので、アートを通じてその場を共有したりとか、お互いに作ったものとかを見て、対等に語り合ったりとかできるような、関係の中で、自然と社会と繋がっていくみたいな、入り口みたいなものがつくれたらいいのかなって思います。

佐藤 今日のテーマでもあると思うんですけども、非常に感心して聞いてたのは、やはり上手な絵とか、綺麗な絵とか、良い感覚してるねとか、そういう一般的に美術を巡って語られてきた様々な権威とか正解とか、そういったものからどれだけ自由になれるかっていうところが勝負だと思いますよね。

それから、その中で自分を作ってきた、自分の表現を作ってきたという一つの本当の意味のその道の達人というのは、絶対的な説得力を持つ。農業でもやはり中途半端な農業じゃなくて、代々大地に根付いて、物を生産して生き続けた本物の農家に会わせたいと思いますよね。農業ごっこは僕でもできるけども、本物の農業はできません。そうするとやはりそういう人たちと僕らが出会っているかどうかです。若者の周りにいる我々がどれだけ本物と出会ってるかどうかっていうのは、大きな共有財産になってくると思います。だから、支援者と言われる人たちが「支援、支援」ってしてたらほとんど魅力ないし、若者はたまったもんじゃないですよ。早く成果出せってせかされてるような感じがして。安心・安全というのはそうい

う一切の成果や評価から自由になっている場の保障だと思いますね。そういう場をどう作るか、そしてそれだけだとどうしようもないので、本物と出会うということがセットになったときに若者は感銘を受けたり、それから自分の中に共感するものが生まれると思うのです。そんなことに感動する自分に気付いたり、そのことで自己肯定感というか、前に進むエネルギーのようなものが生まれていくんじゃないでしょうか。

端山 今お二人の話を聞いていて思い出したことがあって、長谷川三郎作品を取り上げたワークショップのとき（2019年実施）に、20人ぐらいの若者が参加していました。最後のグループごとの発表会のときに、意を決したように立ち上がって、今日見た絵（長谷川三郎の作品）の中で、「空白部分、何も描いてない部分に意味があるということがわかりました」って宣言するみたいにおっしゃった方がいました。びっくりしましたが、この方は自分の発見があったんだってことが強く伝わってきて、嬉しく思ったのと同時に、すごいことが起こったなって感じたことを今思い出しました。それと先ほど佐藤さんが仰っていたけど福祉、教育、労働がやっぱり不可分、繋がってるものであるというところで、この若者支援のプログラムは美術館の中では「社会包摂」と言われることが多いのですが、私たち職員はそういうことをあまり意識してないと改めて思いました。対象者に即した内容について考えて組み立てています。例えば中高生を対象としたプログラムを考えると今回の参加者は中高生だから、中高生ってどんな年代で、どんな感じかかっていうのを検討しながらプログラムを作ったり、今までの中高生と接した経験から作ったりしていくんですけど、この若者のプログラムも同じです。参加者が美術館に時間通りに来られるか、遅れてくるとか、休むということも前提として考えますし、来てからもちょっと調子が悪くなる方もいるので、そういうことも想定しつつ、そういう人もいるよね、そういう人がいたらどうしようかってことも相談し

ながら進めています。実際プログラムを行うときには、言葉は少しずつしか出てこないから、待つ。言葉が出てくるまでボランティアないし私たち職員はとにかくゆっくり待つというか、沈黙を恐れないでいきましょう、沈黙は当然ですっていう意識で、作品をみて、話す。もし何かちょっとでも言葉が発せられたら、その意味を私たち職員も一生懸命考えて、「こういうことを言おうとしてるのだろう」ということを意識しながら会話をしていく。そんなふうに対象者のことはよくよくイメージしたり考えたり経験知から想像したりはするのだけれど、福祉だとか参加者をケアしているような意識が実は職員の中にはないのではないかなと私は思っています。そういうことはさっき佐藤さんがおっしゃった福祉、教育、労働が繋がってるっていうことに共通するものがあるような気がしています。

古藤 まだまだ議論は尽きない雰囲気もあるのですが、そろそろディスカッションの締めに入りたいと思います。チャットでの質問は議論の中でお答えいただきましたが、最後に何か言い残したことがある方はいらっしゃいますか？ 梨本さんお願いします。

梨本 今、端山さんからいただいたお話は、何か声掛けの工夫はありますか、という質問が（チャットに）あったかと思いますが、それにも答えられていたかと思います。やはり、なかなか一筋縄ではいかない、今までの経験が生かされない、それから一般的な学校教育的なやり方では太刀打ちできないところがあって、本当に沈黙ということの大切さもあつつつ、ちょっと暖簾に腕押し的な、確実な効果が出てくる様子が本当に見えてくるわけではないというもどかしさもありますね。それから、リピーターが少ないことがむしろ望ましいと言いますか、就労して支援の場から育っていくということが目標なので、むしろ1回限りの参加の方が望ましいという、そういったプログラムの特性もあって、なかなかその、安易に手を出すのは火傷するぞっていうことも思っています。で

すが、大型の美術館だからこそできたっていうわけではなくて、佐藤さんも仰ったように本当に地域の身近な博物館で、専門性もかなぐり捨ててやっていくような、そういう博物館の方が実は望ましかったりということもあるかと思えます。本当に人次第、出会い次第のプログラムなのではないかと思っています。

古藤 ありがとうございます。

では、時間も近づいてまいりましたので、シンポジウムの締めくくりに向かわせていただきたいと思います。最後に横浜美術館の端山より、一言終わりのご挨拶をさせていただきたいと思います。

端山 今日は皆様ご参加誠にありがとうございました。広報して参加者を募集できないプログラムでしたので、これまで関係者だけで地味に9年間続けてきました。この振り返りを目指してまとめてきた様々な資料に加え、参加者の若者へのインタビューも含めた報告書をこれからまとめつつ、プログラムの意義を改めて捉え直したいと思っています。今回ご参加いただいた方には、報告書がまとまりましたらメールでお送りできればと思っていますので、気長にお待ちいただけたらと思います。まだまだ話せなかったことがたくさんあります。また個別にご質問などありましたら、歓迎いたします。外部の団体と美術館が一緒におこなうプログラムですが、それぞれが違う価値観で一緒に仕事をしていることを今日また改めて実感しました。美術館のプログラムでやれることは本当にごくわずかですけれども、若者支援の専門的な活動をなさっている団体の方々と一緒に行うことで少しでも意義あるものになったらいいなと願いながら、今後のことも検討して参ります。

佐藤さんの文化学習協同ネットワーク、岩本さんのK2インターナショナルについても、ぜひ皆様インターネット等でお調べいただけたらと思います。出版物もたくさん出していらっしゃいます。今日はこれにておしまいにさせていただきます。皆様どうもありがとうございました。

コラム

若者支援プログラムとシンポジウムのこと

シンポジウムの内容の補足として二つのコラムをまとめました。一つは若者支援プログラムを作る側のねらいについて、もう一つは研究プロジェクトとシンポジウムの経緯についてです。

「みる・つくる・はなす・きく」を繰り返し、世界観を広げる

text

端山 聡子

横浜美術館 教育普及グループ
教育プロジェクトチームリーダー

このコラムでは、2014～22年3月までに実施した23種類の若者支援のプログラム^{※1}の特徴について、シンポジウム当日に説明しきれなかったことを取り上げ、補足として述べていきます。

美術館の教育普及としてのプログラム

一般に「美術館に行くこと」は、すなわち「展覧会を見に行くこと」を意味しています。美術館を含む博物館（ミュージアム）には、あまり知られていないいくつかの機能があります。たとえば、（資料・作品を）収集し、保存する、調査・研究をおこなう、教育（普及）・展示をおこなうなどです。若者支援のプログラムは、教育普及のカテゴリーに該当します。また、当館の事業計画書において本プログラムは、教育普及のうちの社会貢献事業として位置づけられています。

社会的自立に困難を抱えた若者への支援が、美術館の教育普及プログラムとして、若者支援団体と連携して継続的に実施されるのは、全国の美術館を見渡しても希少な事例であると思います。

美術館と若者支援施設というふたつの場所で

プログラムでは、横浜美術館での実施と若者支援施設へのアウトリーチという二つの方法をとりました。横浜美術館で実施する場合は、展示されている作品や建築その他を取り上げて内容を組み立てます。そして、アウトリーチの場合は、よこ

はま南部ユースプラザ（以下南部ユースプラザ）やユースワークふじさわ（以下ユースワーク）などで、レクチャーとワークショップを実施しました。これは、参加者の中に若者支援施設への来所のほうが、外出にあたっての心理的抵抗が少ないという方がいるからです。家を出て、プログラム開始時間までに（行ったことのない）横浜美術館に向かうことが難しい方もいます。そのため若者支援施設から、「より参加しやすい場所で開催して欲しい」と求められてアウトリーチ事業が始まりました。

その初回は2016年12月の南部ユースプラザでした。次のステップとして横浜美術館への来館に参加者を誘うため、内容を関連づけています。たとえば、南部ユースプラザのワークショップで取り上げた作品を、横浜美術館で観覧するなどの関連性を持たせました。それまで美術に縁の薄かった参加者である彼ら／彼女らに、訪れてもよい場所、利用できる場所として横浜美術館を認識してもらうためにも、アウトリーチという方法には有効性がありました。

「みること」と「つくること」の往還

内容において特徴的なのは、「みること」（観察や鑑賞）と「つくること」（制作や手を動かす作業）が組み込まれていることです。

展示や作品を見て感想を求められるのではないが、美的な良さを口にしなくてはならないのでは

ないか、という参加者の緊張感を避けるために観察して、みたものを言葉に置き換えるという内容で実施しました。ここでいう「みること」とは、いわゆる「対話型の鑑賞の方法」を採用して用いています^{※2}。

参加者の発言はチーム内で共有します。複数人で同じ作品について話すことで、見ているポイントや気づくこと、それらを表す言葉は人それぞれであることなどから、「みること」（鑑賞）の深まりを体験しました。言葉が発しやすい場作りとして、各チームに混ざる職員は控えめにファシリテーションすること、沈黙を恐れず発言を待つことなどに留意しています。

もの静かな参加者が多いのですが、場の運営次第では時間が経つにつれて発言が増えていきます。話をしないからといって考えていない訳ではありません。考えていることと言葉がスムーズにつながらない場合や、発言すること自体に心理的な負担を感じることもあるでしょう。とはいえ、他者の話はよく聞いているという印象です。したがって、このプログラムをサポートする職員やボランティアは、きく、耳を傾けるという態度を醸成しておくことが肝要です。職員やボランティアとの交流においても、少人数で参加者を中心に据え、穏やかに場を運営しています。

「つくること」においては、想定される完成図や目標はなく、行為の連続や、探究的に制作していくことで、結果的に作品のようなものになるという方法が採られます。また、学校の美術や国語の授業で求められるいわゆる「自己表現」のように、考えや思いを表出させるような制作活動は、対象者に馴染まないのではないかと、という考えから導きだされた内容です。「みること」においての言語化と比較すると、「つくること」は非言語的活動であることに重きをおいています。「つくること」の内容の考案にあたり、石巻ほかでアトリエ・コパンを運営する新妻健悦さんの「造形言語AとB」の理論を参照し、特に造形要素を自立させ、「解のない探索活動であるB言語」的発想

や方法を援用しています^{※3}。

制作中は集中して静かに時間が過ぎていきます。たとえば、本報告書の若者支援プログラムの一覧表^{※4}から、2015年「石田尚志展でのマスキングテープで『私の線』を考える」、2019年「イサム・ノグチと長谷川三郎展の鑑賞&紙の彫刻」、2019年「田中敦子作品から一繰り返し描いて埋める小さな紙」などのワークショップ部分がこれに相当します。具体的な風景や人物などを描くのではなく、試行的行為の連なりや、探究的に制作するうちに、参加者自身でも思いもかけないものが作り出されます。

つまり、プログラム内容は、美術作品や展示を「みること」、手を動かして「つくること」とそこに付随する「はなすこと」「きくこと」を組み合わせ構築されているという特徴があります。「みること」はまず一人で、次に複数で、「つくること」は一人で、あるいは共同制作への展開、発表は参加者全員で聞くなど、個人と共同でおこなうことも組み合わせています。正しい答えはないということと、人と自分との相違を受け入れることを通して、理解を深めていきます。美術や作品は、多様な考えや見方を受容する幅の広さと深さを備えているので、有効に機能します。このプログラムでは、個人活動を基に、参加者相互の、あるいは職員やボランティアとのやりとりを通して、自分や他者について知り、考える時間を共有することで、わずかかかもしれませんが、参加者それぞれの世界観を広げることにつながる内容を目指して実施しています。

※1. 本報告書9ページ「横浜美術館の若者支援プログラムの実施一覧」参照

※2. 『学力をのばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー』フリップ ヤノウイン、京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター（訳）、淡交社、2015年

※3. 「造形言語のA言語とB言語を基軸とするアトリエ・コパンの実践」新妻健悦（アトリエ・コパン美術教育研究所）『美育文化』Vol.61 No.5、2011年9月

※4. 本報告書9ページ「横浜美術館の若者支援プログラムの実施一覧」参照

研究プロジェクトと シンポジウムの経緯

text

梨本 加菜

鎌倉女子大学 児童学部教授

研究プロジェクトの立ち上げと4名の思惑

シンポジウムの元となった調査研究は、2019年12月の端山聡子さんと古藤陽さん、岩本真実さん、梨本加菜の顔合わせからスタートしました。みなとみらい地区が一望できる横浜美術館8階の白いフロアで、何が課題か、ゴールは何かを話し合いました。

2014年から横浜美術館とK2インターナショナルが行ってきた「若者支援プログラム」を改めて検証し、その結果をプログラムの改善や新たな企画に反映させたいという目標は明らかで、生きづらさを抱えた若者が参加するプログラムをよりよくしたいという4名の思いは共通していました。もっとも、それぞれの立ち位置と問題関心、またゴールだと思うことは異なるものでした。

横浜美術館の端山さんはプログラムの立ち上げ時から企画・運営を牽引し、当時は同館の首席エデュケーターだった関淳一さん（現在は版画家）らとともに試行錯誤を続けていました。古藤さんは、心理学や教育評価の観点から調査計画を立て、事業の前と後での数値の評価を考えていました。一般に美術館の教育事業は教育効果が出る時期や効果そのものの可視化は困難であり、古藤さんの知見はその後の調査で大いに生かされました。K2インターナショナルの岩本さんは、単なる就労支援にとどまらず、若者の自己肯定感を高め、能力を引き出せる場としてプログラムに期待を寄せていました。また、調査やシンポジウムの進行、

報告書の作成のコーディネートを行いました。梨本は、鎌倉女子大学の研究助成により2019年度から「地域における青少年の芸術文化活動」の調査研究を行っていました。社会教育の観点から青少年の芸術文化活動を支える教育環境の現状を把握し、教育機会を検討する過程で、若者支援プログラムに関われることはこの上ない機会でした。

コロナ禍にもまれつつ調査を開始

当初は2020年2月に始まる「澄川喜一：そりとむくり」展に関連して行うワークショップでの事業評価を計画しましたが、この頃から新型コロナウイルスが広がって美術館が臨時休館し、展覧会も「閉幕」しました。もともと同館は長期改修の予定でしたが、休館が前倒しとなりました。さまざまな予定変更で戸惑いつつオンライン会議も行って計画を練り直し、2020年2月は鎌倉女子大学学術研究所の倫理審査を経て調査の準備を整えました。

調査内容と結果の詳細は続編となる報告書に掲載しますが、簡単に述べると、2020年春に過去のプログラムに参加者を対象にアンケートを実施し、約30名の回答を得ました。数名はワークショップの印象や経験、またアートや美術館に寄せる思いを細かに書いており、プログラムのインパクトが確認されました。次に、8名にインタビューを行いました。それぞれの若者が通い慣れたK2インターナショナルの施設で、インタビュアー

には関淳一さんも加わり、必ず2名以上でお話をうかがいました。語りの中の生き生きとした描写には、美術館体験の役割を感じざるを得ませんでした。

また、K2インターナショナルのスタッフとともに、2020年5月と翌年の5月に意見交換を兼ねたオンラインの報告会を行い、2020年9月は日本社会教育学会第67回研究大会で、端山さんと梨本が一部の成果を報告しました。その後、2021年度の公益財団法人前川財団の家庭・地域教育研究助成も受けることができ、シンポジウム開催と報告書刊行の準備を進めました。

佐藤洋作氏との出会いと強力な布陣

シンポジウムでは岩本さんの仲介により、文化学習協同ネットワーク代表の佐藤洋作さんを招聘しました。2021年の年末に東京都三鷹市の文化学習協同ネットワークを訪問し、2022年4月は、東京都国立市内で開かれた佐藤さんと岩本さんが出演するトークイベントに同席し、打ち合わせも行いました。佐藤さんと話し合いを重ねるうちに、シンポジウムの輪郭が定まってきました。

2022年3月にはワークショップ「土から絵具を作る」が行われました。詳細は端山さんの報告に譲りますが、まずはK2インターナショナルのファームを訪れ、先史時代の壁画に思いを巡らせながら土を採取しました。改修中の横浜美術館の拠点であるPLOT48では、教育プロジェクトのスタッフかつ日本画家である六島芳朗さんの尽力で、水や土の入ったボールや新聞紙で覆ったふるい等が所狭しと並び、まさに「土から絵具を作る」作業が繰り広げられました。ワークショップ当日は、K2インターナショナルの二つの施設がオンラインでつながり、ユースワークふじさわ（神奈川県藤沢市）では古藤さんと、当時は教育プロジェクトのスタッフだった北川裕介さん（現在は「市民のアトリエ」所属）が手際よく導入を進め、画面越しに端山さんのレクチャーに皆で見入った



ひらくスペース（東京都国立市）にて打ち合わせ

後、土の色や感触をたしかめながら絵具を作り、描いていきました。全員で色に名前をつけた後、参加者は静かに帰っていきました。

シンポジウム当日の字幕表示は、日本補助犬情報センターのご協力を得ました。完璧かつヒューマニティにあふれたオーガナイザーの馳川ゆきのさん、PLOT48で心強いGOサインを出してくださった橋爪智子さん、長年の盟友の松本江理さんには改めてお礼を申し上げます。ちょうどシンポジウムの翌週に身体障害者補助犬法が制定20周年を迎えられたことも、お祝いを申し上げます。

さまざまな出会いと地道な実践から生まれた若者支援プログラムとシンポジウム、またこの報告書が、多くの若者がアートや美術館に親しむ場を広げるための試金石となることを願っています。

ロストジェネレーション(ロスジェネ)

1990年代から2000年代後半の「若者」で、経済成長の悪化のため就労や標準的な生活・家庭の基盤を築く機会を逸した「就職氷河期」と呼ばれる世代。内閣府が2019年に始めた就職氷河期支援は、「不本意ながら」不安定な仕事に就く者や無業者、また学校や職場での「傷付き」で社会参加が難しい者などが約100万人いるとした。2000年代に問題視された「ニート(not in education, employment or training)」に加え、「官製ワーキングプア」の俗称もある非正規公務員や任期付き研究職(ポストク)など、高度な専門性をもつのに薄給の人も含まれる。

一般に「ロスジェネ」は、第一次世界大戦で青年期を踏みにじられたアメリカの作家を指す。朝日新聞の取材班は、不遇な経験を芸術に昇華させたヘミングウェイ、フィッツジェラルドなどの作家をイメージし、問題解決の期待を込めて「若者」を「ロスジェネ」と名付けた(『ロストジェネレーション:さまよう2000万人』朝日新聞社、2007年)。しかしその希望をくじくように、本シンポジウムに登壇した佐藤と岩本も執筆した宮本みち子他『アンダークラス化する若者たち:生活保障をどう立て直すか』(明石書店、2021年)は、「若者」が新型コロナ禍でさらにダメージを受け「アンダークラス化」と警鐘を鳴らした。

8050(はちまるごーまる)問題

経済的・社会的な自立が困難な50歳代の「子ども」を、80歳代の親が支える家族の状況を指す。年金生活で決して豊かではない高齢の親と同居する、もはや「若者」と呼べない年齢の「子ども」と、その家族の、社会的孤立や貧困化が懸念される。若年層の「介護離職」や、主に女性の「家事手伝い」は少なくなく、「家族」をめぐる価値観や福祉・教育等の制度設計も遠因にある。

国立国会図書館(NDL)のデータベースによると、8050問題が初めて論文・記事のタイトルとなったのは2017年で、「親子共倒れ」や「孤立死」などに関連付けて言及されるようになった。「ロスジェ

ネ」や「ひきこもり」が社会問題化した2000年代は「7040問題」とされ、「人生100年」の今日は「9060問題」という言葉も生まれている。

本シンポジウムに登壇した岩本も編集に関わった、K2インターナショナルと「K2家族の会」を母体とする一般財団法人若者自立就労支援協会による二つの冊子(『「80・50問題」って?:こどもの自立に悩む親御さんとともに』WAM助成、2022年)も参考になる。

社会教育・社会教育施設

社会教育は、教育行政において、学校教育や教育委員会の運営などを除いた領域。自治体が公民館や図書館などの社会教育施設を設置し、青少年や体育、芸術などの分野の社会教育団体の活動を活性化させて、学校外の教育の環境を支えて豊かにする仕組みである。学校教育は「先生」と「子ども」がいて、その人数や教育課程に明確な基準があり、自治体の教育予算の8割ほどが投入されるが、社会教育は学習者の自主性に任されて教育内容・方法が多様な上に予算が少ないため、見えづらい教育と言える。さらに近年は多くの自治体で「社会教育」の部局が「生涯学習」の名称に変わり、文部科学省でも「社会教育課」がなくなって「生涯学習」や「地域学習」、「男女共同参画共生社会」の名称の課に分かれ、視聴覚教育(映画など)の分野は学校教育の局に、博物館行政は文化庁に移った。「生涯学習」は高齢者の趣味的活動や、資格取得を目指す民間の通信教育のイメージがあり、「社会教育」の輪郭はさらに見えづらくなっている。

社会教育施設には博物館も含まれ、博物館には美術館も含まれる。戦後は多くの公設公営の社会教育施設が設置されたが、2000年代は公設民営の施設が増えた。また、原則的に公立博物館は教育委員会が所管するが、2019年より、博物館を自治体の教育行政の部局から首長部局に移してよいこととなった。しかし、美術館などが社会教育施設であることは変わっていない。

(文責・梨本 加菜)

横浜美術館と連携した若者支援プログラムは、若者たちの声を聴きながら、たくさんの方が時間と労力をかけてつくってきてくれました。

助成金などもらっていない分、締切も報告の義務もないので、自ら記録を作っていないとね……と集まって検証をはじめました。

アンケートやヒアリングを通じて、このプログラムだからこそできたこと、できないこと、なんども議論をして、この発表の場を作ってきました。

オンラインシンポジウムでは、なかなか語りつくせなかった事、伝えきれなかった事も多くありました。

次はきっとリアルな場で、また皆さんとお会いしていろんな話ができたらいいなと思っています。

この報告書をつくるにあたってはシンポジウムに登壇していただいたNPO法人文化学習協同ネットワークの佐藤さんを通じ、若者たちによる働く場「DTPユースラボ」に編集をお願いしました。短い期間で素敵な冊子にいただき感謝しています。

(岩本 真実)

シンポジウム

「若者支援プログラムを解体し、創造する：9年間のあゆみとこれから」報告書

編集：若者支援プログラム報告書編集委員会

発行・協力：横浜美術館 教育普及グループ

K2インターナショナルグループ

鎌倉女子大学 学術研究所

DTP・デザイン：DTPユースラボ(高橋薫、中村一馬)

表紙・扉デザイン：梨本真菜

助成：公益財団法人 前川財団

字幕：特定非営利活動法人 日本補助犬情報センター

発行日：2022年7月31日



2022年7月発行